

東海市名和町  
堂ノ前貝塚  
発掘調査報告

昭和47年3月

東海市教育委員会



東海市名和町  
堂ノ前貝塚  
発掘調査報告

吉田富夫



## 序

東海市名和町八幡東に在住の、名古屋市立大江中学校教諭池田陸介氏が、名和町堂ノ前に小島親政氏により、建築のため敷地造成工事を実施していた現場で、弥生後期の土器破片、その他数点を採集し、貝塚ではないかと、現品を持参し当教育委員会に届け出られた。

委員会は、日本考古学協会会員で、東海市史資料編第1巻の原始・古代・中世を担当監修された、吉田富夫先生に調査を委嘱した。

先生はご多忙中にもかかわらず、ご快諾され直ちに実査し、発掘についての方針を示された。当委員会は、まず建築主小島親政氏に協力を求めた。氏は極めてご理解が深く、承諾はもとより、種々格段の便宜を計って下さったことを感謝したい。

なお、発掘に際しては、市文化財調査委員各位、上野中学校教諭ならびに生徒諸君、池田陸介氏をはじめ地元有志の方々に、ご奉仕を賜わったことを、本書の発刊に当たり深甚なる謝意を表する次第である。

東海市史編集のために、貴重な資料がふえたことを、同慶に思う。

吉田先生は調査終了に引続き、報告書原稿を作製され、昨年夏当委員会へ提出されたので、印刷についての打ち合わせは、すましていた。ところが吉田先生は突如11月21日ご逝去遊ばされたため、印刷過程におけるご指導が願えず、従って先生の望まれていた書物に、なり得なかったであろうことを遺憾に思う。先生の霊前に本書をお供えし、心から生前のご労苦に対し、謝意を表し、ご冥福を祈る次第である。

昭和47年3月

東海市教育委員会

教育長 築 波 善 夫



# 目 次

序		
第 1 章	緒 言	1
第 2 章	調 査 の 経 過	2
第 3 章	地 形 と 遺 跡	3
第 4 章	遺 跡 の 状 態	5
第 5 章	縄 文 時 代 遺 物	7
第 6 章	弥 生 時 代 遺 物	8
第 7 章	石 器	10
第 8 章	古 墳 時 代 遺 物	12
	1. 土 師 器	12
	2. 須 恵 器	13
	3. 土 錘 付 有 孔 土 製 品	14
第 9 章	奈 良 時 代 遺 物	15
	1. 須 恵 器	15
	2. 瓦	15
	3. 甗	16
	4. 角 形 土 器	16
第 10 章	平 安 時 代 遺 物	17
第 11 章	鎌 倉 ・ 室 町 時 代 遺 物	19
	1. 無 釉 ・ 灰 釉 陶 器 (猿 投 窯)	19
	2. 無 釉 ・ 灰 釉 陶 器 (常 滑 窯)	19
	3. 内 耳 鍋	23
第 12 章	江 戸 時 代 お よ び 以 降 の 遺 物	25
	1. 陶 磁 器 等	25
	2. 硯	27
	3. 砥 石	27



4. 鞆の口	27
5. 鉄器・鉄鋳	29
6. 貝塚の貝類・獣骨類	29
第13章 考察	32

### 挿 図 目 次

第1図 遺跡付近地図	4
第2図 遺跡実測図	5
第3図 第1トレンチ外(北側)の貝層断面	6
第4図 縄文晩期土器破片	7
第5図 弥生後期土器破片	8
第6図 磨石・叩石・砥石等	10
第7図 土師器破片・土錘等	12
第8図 須恵器破片	13
第9図 奈良時代須恵器・平瓦・角形土器破片	15
第10図 陶碗等破片	17
第11図 無釉・灰釉陶器(猿投窯・常滑窯)破片	20
第12図 (1) 内耳鍋破片	21
第12図 (2) 内耳鍋破片	22
第13図 陶磁器(染付その他)破片	26
第14図 常滑焼・渋紙手破片	28
第15図 鉄釘・鞆の口破片	30

### 図 版 目 次

図版第1 堂ノ前貝塚全景	
図版第2 北側の貝層断面全景・上野中学校職員生徒らによる第1トレンチ発掘	
図版第3 縄文晩期土器破片・弥生後期土器破片	
図版第4 弥生後期土器破片・土師器破片・叩石	



図版第5 磨石・砥石

図版第6 須恵器破片・同内面の同心円叩文

図版第7 平瓦・専瓦

図版第8 角形土器破片・須恵器破片・弥生後期土器破片・有孔土製品破片  
・無釉陶器破片

図版第9 灰釉・無釉陶碗破片・緑色灰釉把手付水瓶破片・陶丸・常滑焼大  
甕破片

図版第10 内耳鍋

図版第11 染付等陶磁器破片

図版第12 常滑焼等・鞆の口・鉄釘・鉄鋅

図版第13 貝殻・馬歯・獣骨破片・船津神社境内出土軒平瓦破片



# 第 1 章 緒 言

愛知県東海市名和町堂ノ前貝塚の発見は 全く偶然の機会によるもので、かねて郷土史に関心の深い、本町在住の名古屋市立大江中学校教諭池田隆介氏が、今春町内の丘陵上で、一般に奈良平安ごろの製塩用具と言われている、いわゆる角形土器を採集しておられて、耕作中の老婆から、そういうものなら船津神社の西側にもあって、貝殻も出るということを知り込まれて、実査確認せられたに始まる。

昭和46年3月14日、同校教諭加賀宣勝氏（日本考古学協会会員）と、ここを試掘せられた池田教諭は、厚さ 約1.5mの貝層中から、弥生後期土器・須恵器・無釉陶器・角形土器・内耳鍋・江戸時代陶器等を得られ、表面採集ながら甎の一片をも採集せられて、これを本市教育委員会に提出せられた。

日本考古学協会会員吉田富夫は、本市教育委員会の委嘱を受けて、3月26日これを実査し、あわせて遺跡の実情をも踏査したところ、台地端に形成せられた貝層の先端一最も厚い部分は、すでに削除せられて、住宅用地のためのコンクリート壁を造築する準備がなされつつあり、事情さえ許せば直ちに宅地造成・住宅建設と工事の進行が予想されたので、とりあえず本市教育委員会より工事進行の延期を地主小島親政氏に申し入れ、かつ発掘調査の便宜を計られるようお願いしたところ、小島氏は全く快くこれを全面的に受け入れられて、ここに下記の通り発掘調査を遂行することができたのは、全く小島氏の好意によるものとして、ここに深甚な謝意を表し、かつまた文化財行政に対する十分な理解には、限りない敬意を払う次第である。

さて吉田は視察の結果、甎の存在を重視し、また貝層の状態がすでに池田教諭から混乱状態であることを知らされてはいたが、とにかく厚いので、貝塚の全貌を明らかにするため、台地端に沿い貝層を発掘することと同時に、台地端に直角に試掘トレンチを1本入れることを計画し、春季休暇中に地元の上野中学校教諭・生徒から成る調査団を構成して調査に当たられるよう要請して、一応帰途につくこととした。

## 第 2 章 調査の経過

4月2日(金)晴 午前9時、現地に山本市社会教育課長・坂野社会教育係長・荻田・吉田・石岡主事・市議会議員木下信男・石野市文化財調査委員・上野中学校教諭および生徒38名、池田名古屋市立大江中学校教諭・吉田ら集合して、実測図作製後、ただちに発掘にかかる。北側のコンクリート壁沿いを、長さ11mにわたり、巾2.5mの目標で崩して行く。層序はなく、江戸時代遺物を主体とする新しい貝層で、ままその間に、縄文以降歴史時代までの小破片を混在させている。従って層位的発掘を試みる必要を認めず、遺物採集に専念するほかはなかった。

吉田市企画課長・築波元公民館長ら視察、朝日・中日両新聞社員来訪取材。

4月3日(土)晴 学校の都合で午後1時発掘開始、市社会教育課員・石野・長谷川・堤委員、教諭引率の上野中学校生徒40名、池田教諭参加。加古市文化財調査委員長・早川・片田・石川委員視察。

前日に引続き第1トレンチのほか、中央部を縦断する第2トレンチ(4m×2m)を設定して発掘を始めたが、期待に反して遺物少なく、層も表土下ただちに第三紀層なので、作業を中止する。

4月4日(日)小雨後晴 市社会教育課員・市文化財調査委員・教諭引率の上野中学校生徒46名、池田教諭参加。第1トレンチ発掘継続して(図版第2下図)、底に達する。一方第1・2トレンチを結ぶ第3トレンチ(8.5m×2m)を発掘開始、また南端において、第4トレンチ(4m×2.5m)を発掘したが、いずれも第2トレンチと同様で、多少の遺物を表土中に発見しただけで、ただちに第三紀層の地盤に到達したので、中止した。以上を以て本貝塚の主要部分は発掘を終えたので、調査は午後3時全く終了した。



### 第 3 章 地形と遺跡

東海市名和町は、第三紀新層の丘陵地帯であるが、その北西部には狭小な谷が若干あって、ほぼ旧観を残していると見られ、(第1図)船津神社社地となっている標高10~15mの丘陵は、さらに東方背後では、最高の標高22.9mを数える、名和小学校敷地となっているが、船津神社西辺では、丘陵は急角度をなして、はっきりとした斜面で、標高2m余りの低地に接している。そしてその低地は南北に長く300mほどあって、北西方に向かって開いており、ごく近世までは、低地がそのまま鍵の手状の海として湾入していたことは、南方と西方・北西方の丘陵縁にそれぞれ大きな松の老木があり、これを目当てとして船がはいて来たという伝承を、今に伝えていることから、容易に推察できることである。

船津神社の丘陵は、この谷では最も高い丘として、その往古の水辺に臨んでいたわけだが、近年その西麓をめぐる道路が拡幅改修せられ、丘陵の突端を切って、5m巾の舗装道路となっており、それより西の突端部は削平されて、細長い三角形を呈して狭いながらも、宅地として利用されようとして、いよいよ着工も近い将来のこととなったために、コンクリート壁を丘陵端に築造することとなって、若干の遺物や貝層の貝殻などが露出發見されるに至ったのであった。

(図版第2上図)

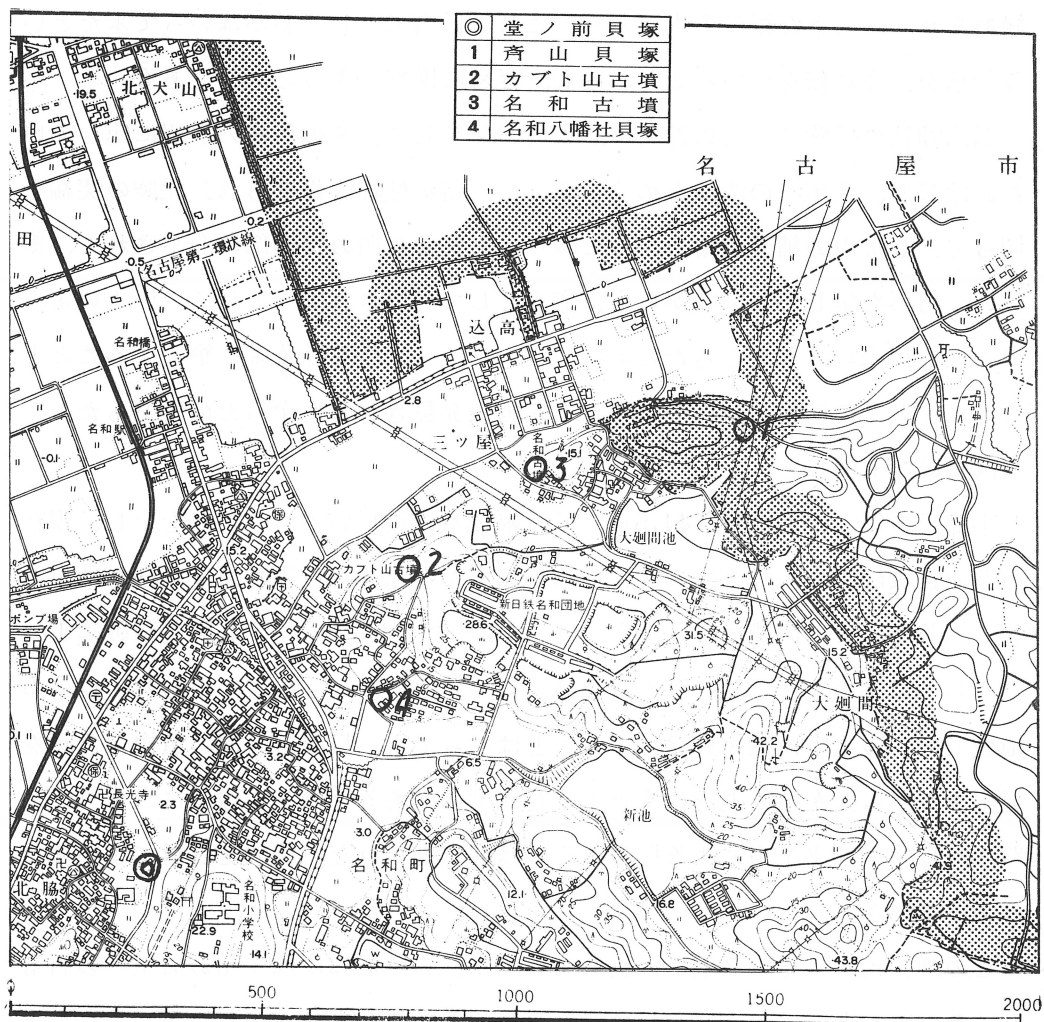
小島氏の住宅用地は長さ44.5m、最大幅12mの細長い不整三角形を呈し、現在道路面とはほぼ等高、標高約5m、道路を隔てた船津神社丘陵断面最高部には+3.66mの差を、また西隣する水田面には-2.2mの差を持つ。(第2図、図版第1)

そして遺跡の主体と見られる貝塚は、その北西辺に沿う全域に限られ、自余の地域では、表土中に遺物を発見することはあっても、貝層その他の遺物包含層を見出さなかったから、遺跡はもともと存在せず、あるいはその縁辺に当たり、道路または宅地削平工事による攪乱あるいは混在も免れない状態だと見てよいのではあるまいか。

この地、現在は「堂ノ前」に属しているが、古い俗称には「元鍛冶屋」の名もあったとの古老の言であるが、後述の通り、鞆の口や鉄鋳がわりに多く出たこと

から見ると、その名と実とが全く一致したことが知られ、甚だ愉快であったが、一方そうした地名が残っているくらいだから、そんなに古いことではないに相違なく、せいぜいやはり江戸時代も後半—大半の遺物の示すところと一致すると見ていいのではあるまいか。

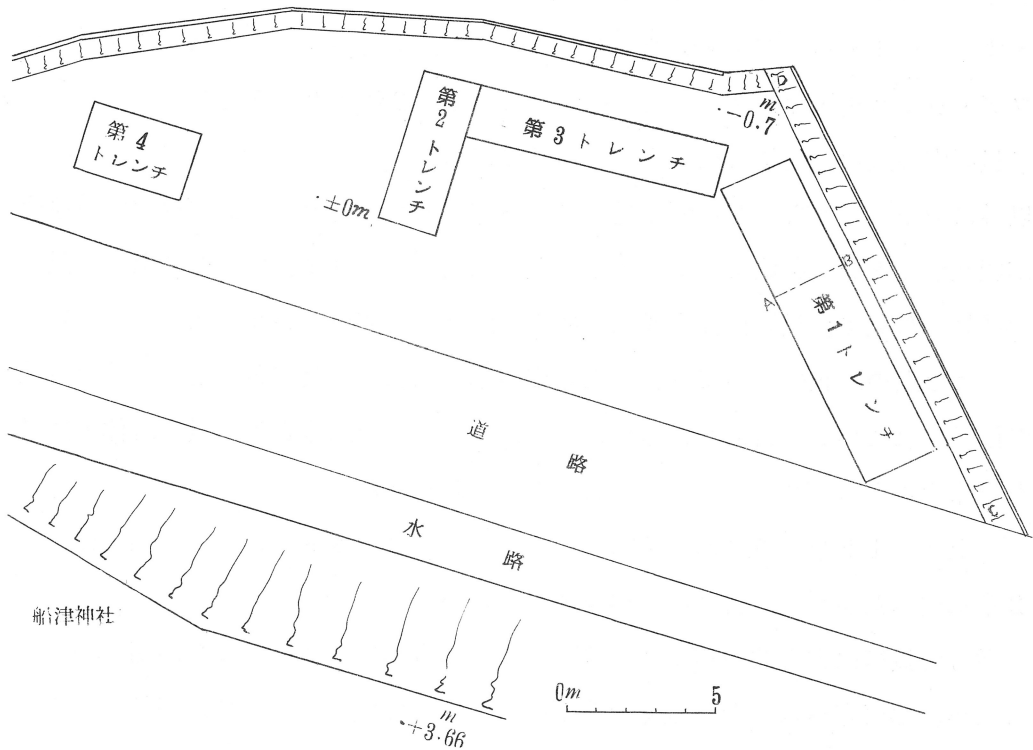
なお「堂ノ前」については、西方スーパーマーケットのある辺に、かつて阿弥陀堂があり、そこからつけられた地名であろうとのことであったので、その阿弥陀如来坐像が近くの長光寺に現存するというのを聞いて、発掘終了後拝観の機を作ってもらった。鎌倉様式で、全高60cm 膝張50cmの寄木造・彫眼の像であった。



第1図 遺跡付近地図

## 第4章 遺跡の状態

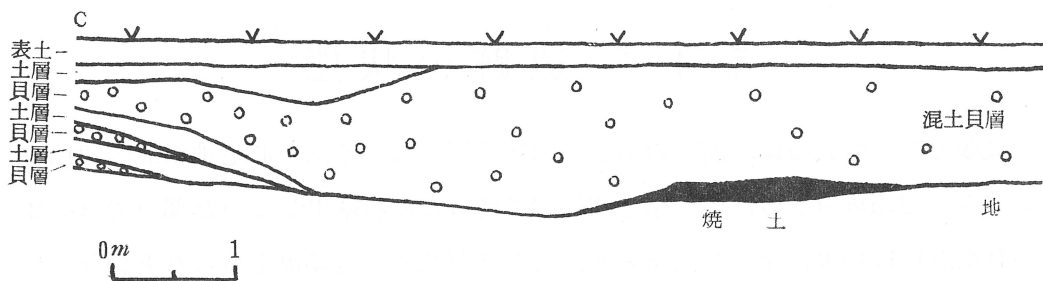
貝塚としての貝層は、前述の通り、旧丘陵縁に当たる三角形宅地の北西辺18mに沿う巾2.5mのものだが、厚さは縁端で切ったため露出していた部分で（第2図B地点）1.15m、ないし池田教諭によれば西端では1.5mもあったという。しかし地盤は当然のことながら、丘陵の奥に向かうに従って、ほぼ直線的に浅くなって行き、A地点では、わずか7cmしかなかったから、もう少し奥へ進めば、当然消失するものと思われる。



第2図 遺跡実測図（東海市都市計画課員協力）

表土はA地点で21cmだが、全域ともに大体大差ない状態であった。貝層は上部は混土貝層であるが、下部には純貝層もしばしば見られ、二枚貝の合わさったまま、混乱していない状態を示しているものも少なくなかった。また道路寄りの方では貝層と土層とが三層ずつ互層をなしている部分もあり、貝層の底には焼土面もあって、鍛冶屋の仕事場の跡を思わせる状態もあった（第3図）。





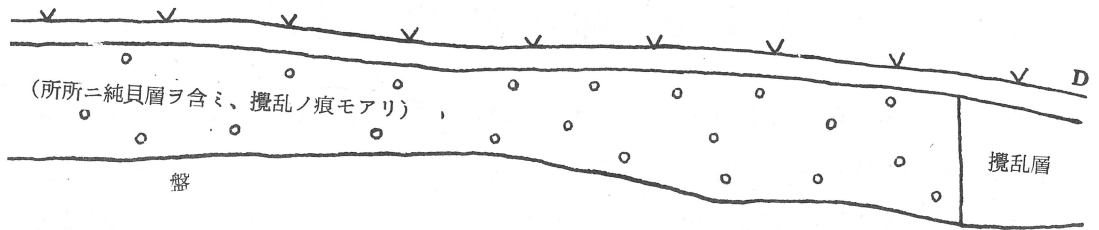
第3図 第1トレンチ外(北側)の貝層断面(東海市都市計画課員協力)

貝類は主として鹹水産で、ハイガイ・サルボウ・カキ・シオフキなどがわりに多く、アカニシ(殻背の割ってないもの)もよく見られたが、次にはオオノガイ・オキシジミ・ハマグリ・アサリなどの順で、だんだん少なくなり、サザエ・アワビ・ウミナ・オオタニシなどは各わずか1~2例にとどまった。

貝層中の遺物包含状態は、全体を通じて江戸時代の陶磁器類が最も多く、それ以外にやや目立つものとしては甕の口や鉄鏝があり、その間に縄文~室町の遺物が混在するという状態で、層の上下の変化は全く見られず、さりとて上述の貝層の状態から見て、貝層自体形成以後にまた攪乱を受けたという状態でもなかった。この点の解釈については、また考察の章で触れる機会があろうが、池田教諭が攪乱されていると言われたのは、新旧遺物の混在を意味され、貝層自体の攪乱を意味するものではないことが、これでよくわかった。

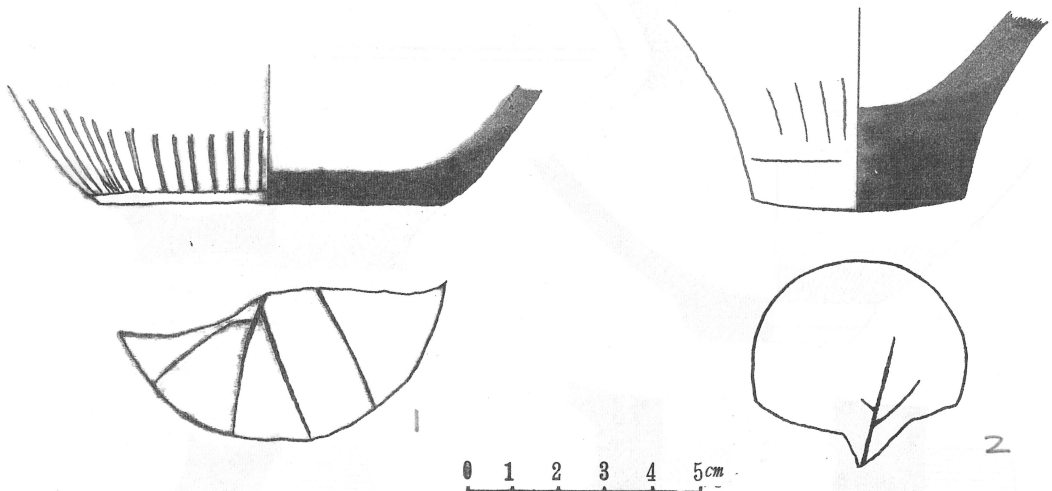
以上は第1トレンチにおける所見であるが、第2~4トレンチについては、第2章に述べた通りで、特に記すべき所見がない。

従って貝塚は宅地北西辺にとどまり、より南方へは延びないことが明らかになったが、北東方へは、おそらく道路下の方へ延びていることが当然想像されるわけである。



## 第5章 縄文時代遺物

縄文時代遺物として、明確に記述できるのは土器破片だけである。後述する石器のうちにも、一見してすぐそれと明白に同定することのできるものはないので、別章に一括して記述することとした。



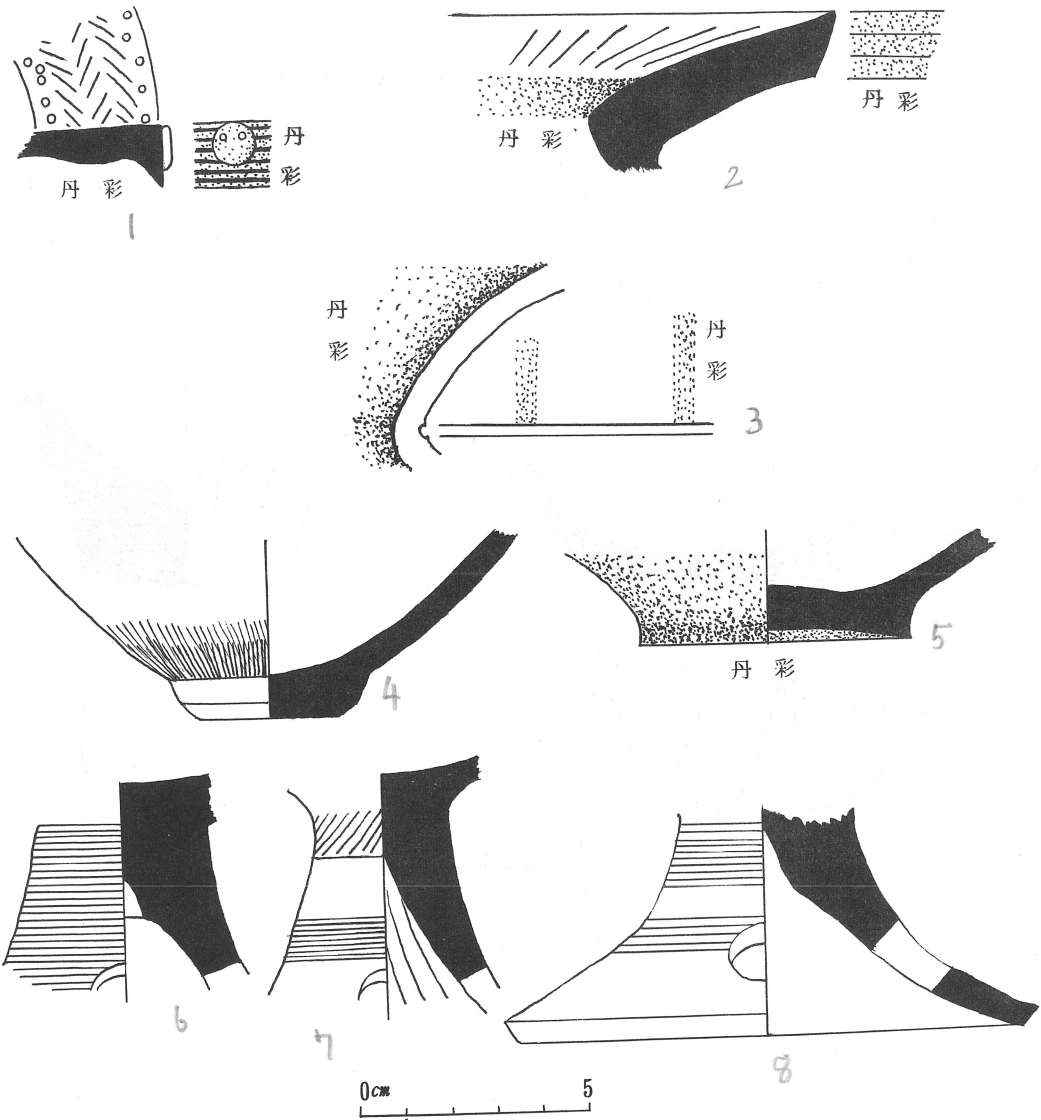
第4図 縄文晩期土器破片

土器破片4個はすべて小さいものなので、よくはわからないが、まず晩期に属すると思われ、胴に斜行条痕文を有するもの(図版第3上図右)や、やや細い条痕を、ときとしてまばらに、縦位に施し、底面に木葉の圧痕を残す底部(第4図、図版第3上図左)などがあるに過ぎない。底部に木葉の圧痕を残すのは、晩期も初頭の雷式に多いようだから、そのころのものと考えてよからう。

## 第 6 章 弥生時代遺物

弥生時代遺物も、若干のそれらしい磨石の類を除けば、やはり土器破片に限られ、後期も後半の丹彩土器や、高杯などを含む。

壺では、丹彩の口縁端面と口内下半とを持ち、口縁上（内）面には斜行直線文



第5図 弥生後期土器破片

を持つやや厚目のもの（第5図上右、図版第3下図下左）・薄手で丹彩の口縁の端面と下（外）面とを持ち、端面に小形竹管押捺による小円文2箇を飾る円形浮文を貼付し、口縁上（内）面には、同様の小円文2列を以て、短い羽状直線文3列を挟む意匠に成る装飾を施したもの（第5図上左、図版第3下図上左）・頸部の破片で、口縁内部を丹彩し、頸部外面にも屈折部に1線を刻し、そこから数条の丹彩直線文を縦位に間隔を置いて施したのではないかと思われるもの（第5図第2段）などがあり、なお丹彩が底面までも全面に及んでいる例（第5図第三段右、図版第3下図下中）がある。丹彩のない普通の壺の底部で、わりに底部の突出した例（第5図第三段左、図版第4上左図下）もある。

高杯には、丹彩のあるものを発見せず、ただ脚部上半に並行直線文・斜行直線文を飾ったもの（第5図最下段、図版第3下図右列、図版第8下図上右）などを見るにすぎない。丈の高いものと、低くて拡がるもの（図版第4上左図上中段）とがあるが、孔はすべて3孔と思われる。



## 第 7 章 石 器

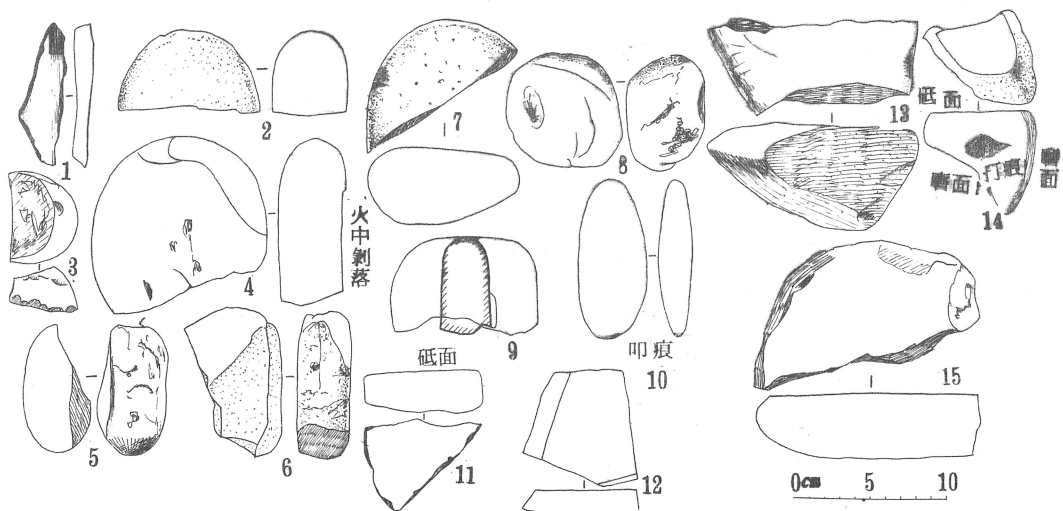
石器は、磨石の類は、縄文・弥生に遡るのが普通と思われ、また砥石の類は、一般にいくらか時代が下降し、甚しいのは近世にまで降るのではないかと思われるものまでを含み、一概に土器のように時代を明確に同定しがたいので、ここで一括して述べておく。

石劔(?) 利用砥石(第6図1、図版第5下図左端) 緑泥片岩を用いており、一面がよく研磨してあるので、石劔または石棒らしい感を持つが、裏の破砕面にも条痕様に磨った痕があるので、そういう石器の破片を利用した一種の砥石ではないかと思われる。

磨石(第6図2・3・4・5、図版第5上図) 火成岩質のものが多いが、硅岩製のものもある。楕円形で厚みがある通例のもの、4は焼け損じたとみえて片面を変色剝落させているが、5も同様に火中した変色を見せている。

叩石(第6図7・8・9・10、図版第4下図) 長楕円形の硅岩質で、一端にだけ叩痕を残すものと、塊状の砂岩製で一端にやや広い打痕を残すものがある。

前記叩石中第6図9の例も、実は一端に打痕を有しているが、大ききの点から考えて、叩石として臨時に使用されたこともあろうが、一応本来は磨石であろう



第6図 磨石・叩石・砥石等

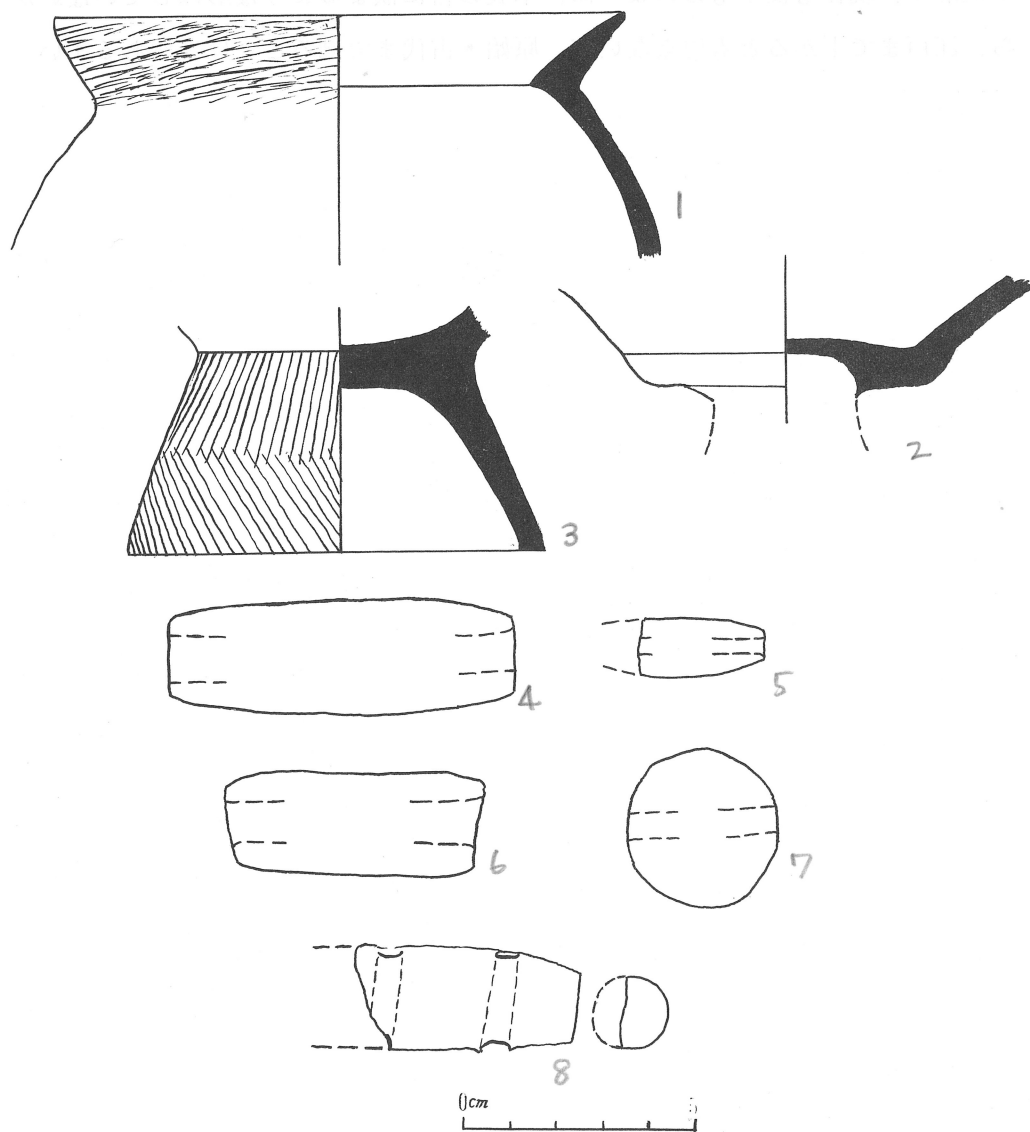
と考へて、その中に加へておいたことを、ここで断つておく。

砥石（第6図11・12・13・14・15、図版第5下図）やはり塊状で、手持ち砥石らしく、磨面・砥面・打痕などを各面にもつもの（第6図14）や、「置き砥石」とでも言おうか、土間に半ば埋め込んで使つたと思はれる。砂岩製の平たい自然石で、台状の上面だけが砥がれているもの（第6図13・15）と、もう一種類近世風の薄い板砥石（第6図11・12）とがある。もっともこれとて、砂岩製ではあるが不定形で、現在も使うもののように、木製の台に嵌まるような形はしていないから、江戸まで下がると思へないが、原始・古代まで遡ることは当然あるまい。

## 第 8 章 古墳時代遺物

1. 土師器 無文または刷毛目文だけの小破片は、なかなか弥生式土器と区別しにくい。

しかし第7図上、図版第4上右図上左に掲げる甕の上半の破片は、頸部断面に特徴があって、作りの特異な点が指摘でき、著しく屈折部を内側に向かって厚く



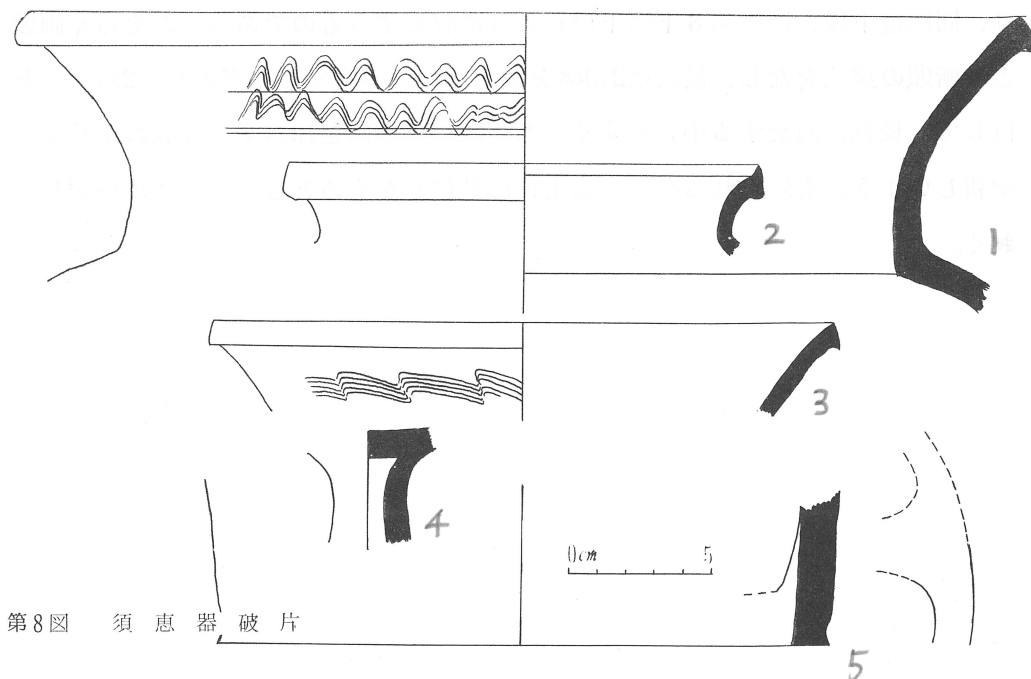
第7図 土師器破片・土錘等

しているのは、弥生式の甕には見ないところであるばかりでなく、かえって平安ごろのものに似るようにも思われて、これを古墳時代もかなり下げた位置づけを与えたいと考える次第である。

逆に第7図右、図版第4上右図上右の高杯杯部は、下端の稜の部分に膨らみのある木口が見えて（註2）むしろ弥生後期と考えたいくらいであるが、篋使いが粗雑で、土師器に類する点が高い。

また第7図第3段、図版第4上右図下左の甕台部は、比較的素直な作りの上に、台部内面に土師器にときとして見られる成形痕がないので、これも弥生後期と考えてもいいところであるが、ただ外面の刷毛目文が羽状をなしている点が、弥生式には見られず、むしろ土師器らしく思われるのである。

2. 須恵器 甕の口部があり、それぞれ無文・波状並行線文・上下2段の波状並行線文で飾られており（第8図上より3個、図版第6上図上右）、そのうち最後のものは、内外両面ともに黒色に塗られ、釉状に融けてかかっているもので、明らかに水漏れを防ぐ意図に出たものと思われる。かような一種の黒色施釉を見るものは、少少時代が下がると見られる。



第8図 須恵器破片



胴に叩き目文がある平底もあるが、これもやや時代の下る甕であろう。色調青みを帯びているのが印象的である（図版第6上図下段左より2）。ほかにやはり甕と思われる破片で、外面叩き目文、内面同心円（青海波）文のあるもの（図版第6下図）があり、これも外面に青灰色に発色する化粧土をかけているのが特異である。また内面文の同心円の中心に、「十」字状文がはいっているのも珍しい。

高杯脚部は2個あるが、特に記すべきことはない（第8図第4段、図版第6上図下段）。

最後に甕の底部の破片がひとつある。これは直立に近い胴の下端を少し削って繰り込んでおり、底の中央に一本の橋部を渡して支えとする型式である（第8図最下段）これは5世紀後半を遡らぬものであろう。

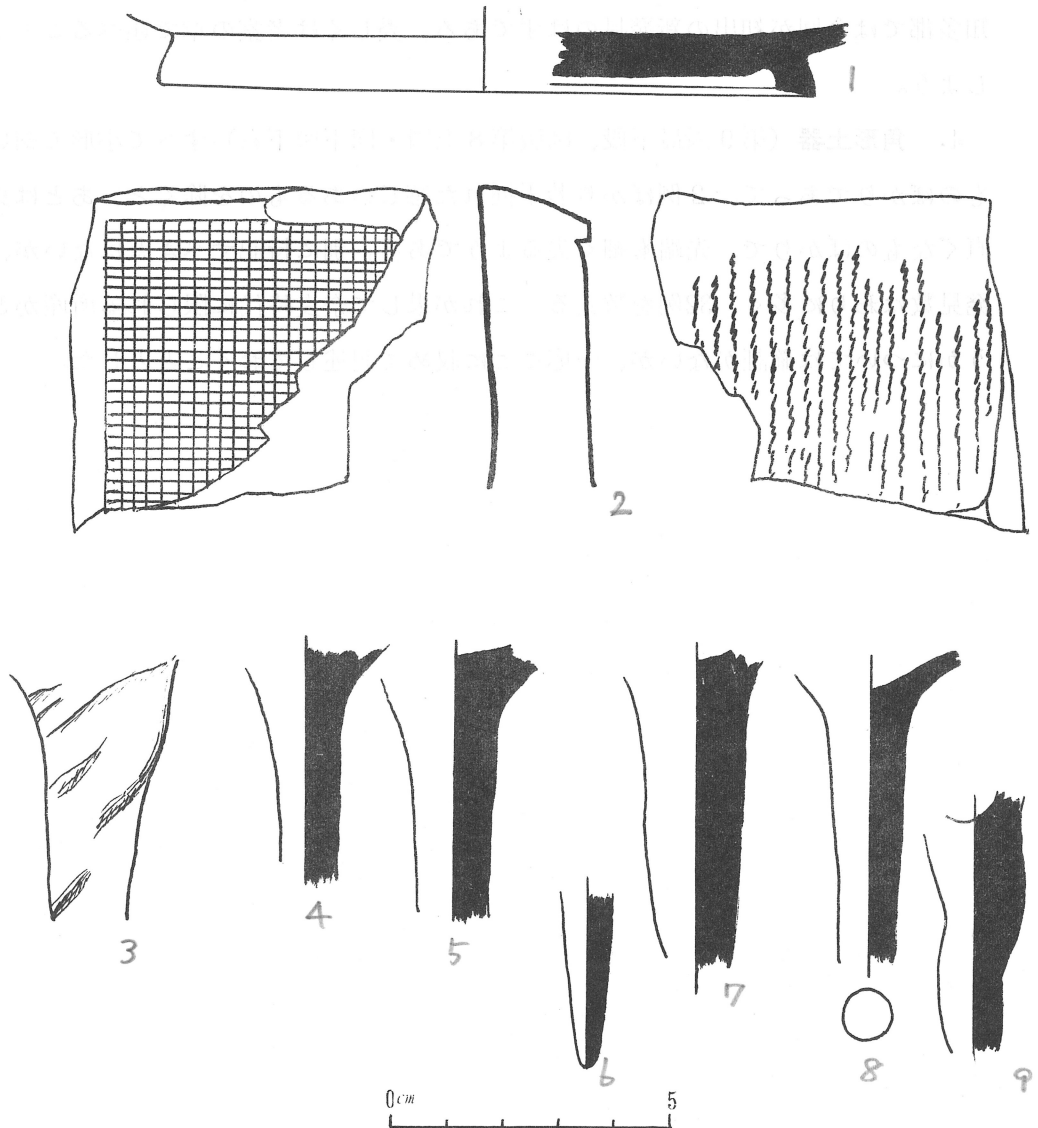
3. **土錘付有孔土製品** 土錘は4個あるが、すべて土師質であり、そのうち1個は径3cmのほぼ球形をなすが、残りはみな大なり小なり円筒形であり、長さ7.4cm、径2.4cmのものを最大とし、最小のものは全長は折れて不詳、径1.3cmを数えるにすぎない（第7図第4・5段）。

ここに時代不詳ながら、土錘に酷似する土製品として載せなければならぬのは、同図最下段、図版第8下図下段右よりに収録するものである。おそらく両頭とも断頭の錘状をなし、最大径2.3cmを数えるが、中空でなく充実し、2箇所を並行して、長軸に直交する小孔を開く。寡聞にして類例を知らず、焼成の感じがやや新しいようにも思われるが、一応土錘に類似したものとして、ここに併記しておく。

## 第 9 章 奈良時代遺物

1. 須恵器 高台にある杯（第9図、図版第8上図右端）の破片が知られるだけである。

2. 瓦（第9図第2段、図版第7）平瓦の小破片ばかりで、凹面は、平織の1cm平方に縦横各6～8本の細い糸（おそらく麻の類であろう）を粗く織って空隙の多い布の痕を印しており、凸面には縄目文を一辺に平行に規則正しくつけてい



第9図 奈良時代須恵器・平瓦・角形土器破片

る。厚さは約 2 cm。

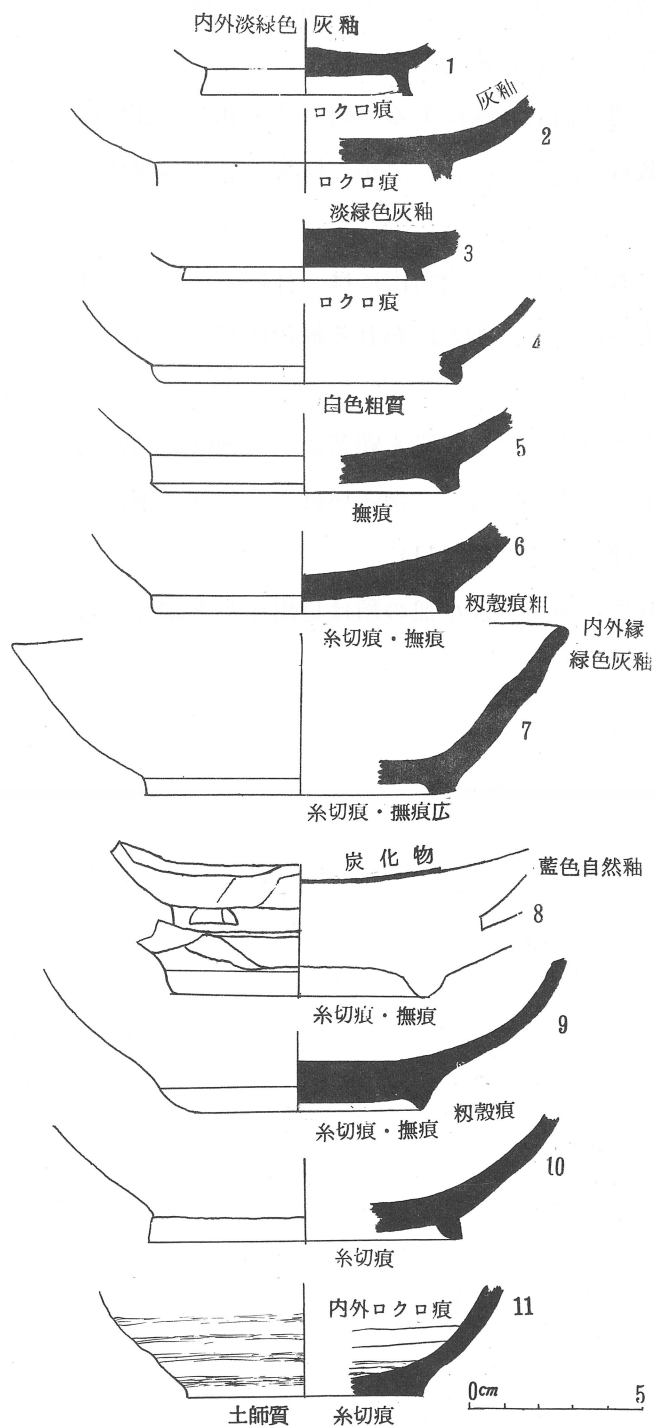
3. 甗 (図版第 7 上図上右) ただ 1 個で、しかも池田教諭が、貝層を離れた南方で表面採集されたものであるが、特に重要な遺品であるから、ここに収録しておく次第である。

厚さ 8 cm で、平滑な両面を具えることだけが知られるに過ぎない小破片であるが、甗としか考えようがない。

甗を出した寺跡・瓦窯跡は、県内では多くなく、ほとんど尾張部に限られるが、知多郡では今回が初出の新発見のほうである。委しくは考察の章で述べることにしよう。

4. 角形土器 (第 9 図最下段、図版第 8 上図・同下図下右) すべて小形で細いものばかりであって、2 例ばかり若干振れた感じのあるものを除くと、あとは真直ぐなものばかりで、先端も細く尖るようである。別に特記すべき点はないが、発見数はわりに多く、32 例を数える。これが果して奈良時代に限られる所産かどうかについては確証がないが、一応ここに収めて記述しておくこととした。

## 第10章 平安時代遺物



第10図 陶 碗 等 破 片

灰釉・無釉陶碗（第10図、図版第9上図）すべて底部を主体とする破片が目立ち、口部破片はきわめて少ない。

①高台の作りが高く、断面縦長の平行四辺形のは、高台内の底面に整ったロクロ目を残し、糸切りが行なわれた痕を示さないのが特色のひとつとなっており、内外面に淡緑色の灰釉がかかっていることは、これを意識的にかけたものようである（同図1）。

②同上の型式で外面に施釉の痕のないものは、内面にやはり緑色灰釉が見られても、意識的か後続する型式のように自然釉かを区別することができない（同図2・3）。

③瓷器風に胎土白色のもの（同図4）。

④高台に粗穀痕が残り、かなり低くまた厚くなると、底面に糸切り痕を残すようになるが、それでもまだ高台の周囲をかなり広く指頭で撫でて、その糸切

り痕を消して平滑にしている。内面には自然釉や付着物が見える（同図5～7）。

⑤高台が断面三角形を呈する段階になると、高台内側の指頭による撫で痕の中は、わずかにひと撫でにすぎなくなり、だんだん簡略化されて行く製作過程をよく示している。内面の自然釉や付着物は前者同様にある（同図8・9）。2個体融着したままで上面厚く炭化物が蔽っているものは、窯から何故にここへ運ばれたか不可解である（同図8）。

⑥ついにはその撫で痕は全く見られなくなり、高台内には一杯に糸切り痕だけが露呈しているようになる。これも内面に自然釉と思われる緑色灰釉が見られる（同図10）。

⑦ほかに土師器質素焼で、内外面にロクロ目を何段も顕著に見せ、底は平底で、糸切り痕をそのままに残しているものが1個あった。あるいは少少時代の下がるものかもしれないが、一応ここに挙げておく（同図11）。

なおすべての器型を通じて、これに付随すべき小皿の類は見出すことがなかった。

## 第 11 章 鎌倉・室町時代遺物

### 1. 無釉・灰釉陶器（猿投窯）

①無釉陶碗（第11図左列、図版第9下図下右）底部破片ばかり2個、うち1個は付け高台のかって存した痕を残し、高台内の底面には糸切り痕を残すもの、他の1個は靱殻痕をもつが、あるかなきかのきわめて残存型式的な低い高台をもつもの。

②無釉陶片口ただ1片であるが、片口部と思われる彎曲部をもつ口部、成形の際の指頭痕が顕著である。

③無釉陶丸（第11図左列、図版第9下図下右より2）ただ1個を発見しただけである。

④緑色灰釉把手付水瓶（第11図上右、図版第9下図上右）頸から胴上部へかけての破片で、胴上部と中部に櫛描き4線の並行線文を施し、もと把手の付いていた痕を残す。貫入がはいった淡緑色灰釉が全体に美しくかかり、気品の高い作風である。

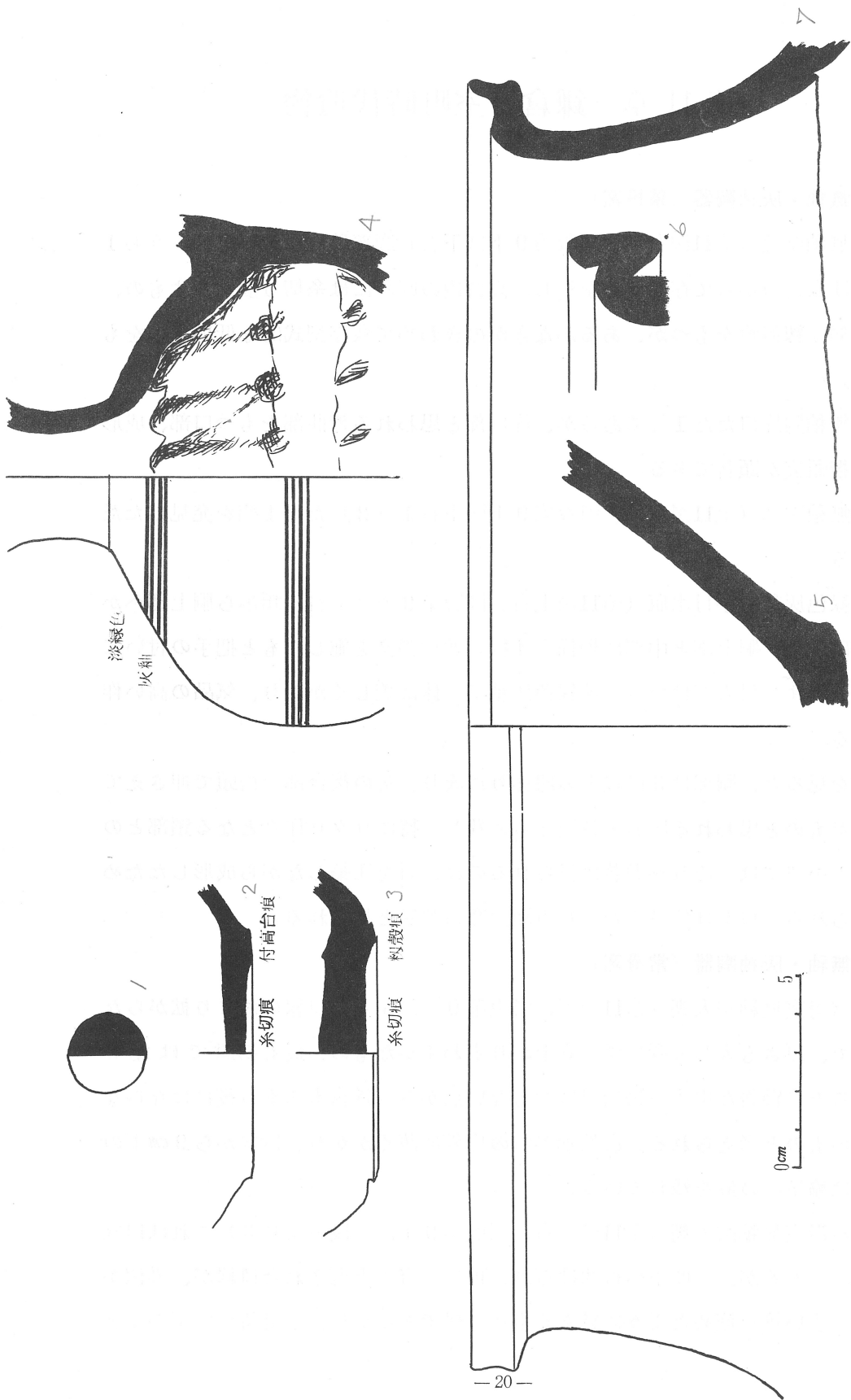
内面を見ると、胴部は3段以上の紐作りに成り、その接合部を指頭で押さえては積んだものと思われる圧痕を各段ともに残し、特にロクロ作りとなる頸部との接合部との境では、それが顕著に見られるのは、肩を圧縮しながら成形したためとも見られる。以上は猿投窯ないし古瀬戸窯の製品と見られる。

### 2. 無釉・灰釉陶器（常滑窯）

①常滑窯無釉陶大甕（第11図下、図版第9下図左上）口縁のあまり拵がらないもので、厚さも大して変らず、立上がりもわずかなもの、最も初期ではないが、さりとて顕著な巾広の帯状口縁でもない点から、鎌倉もあまり後にはならないうちのものと考えられる。自然釉が口の内外に薄くかかり、口縁から9cm下の内面には輪積みの痕を残している。

②常滑窯無釉陶大甕（第11図下右、図版第9下図下段右より3）これは口縁の小破片であるが、一度下へ折曲げられ、再び上方へ折返された口縁が、外側から見ると広い箍を箆めたように見える帯状口縁であるから、室町時代に下がると

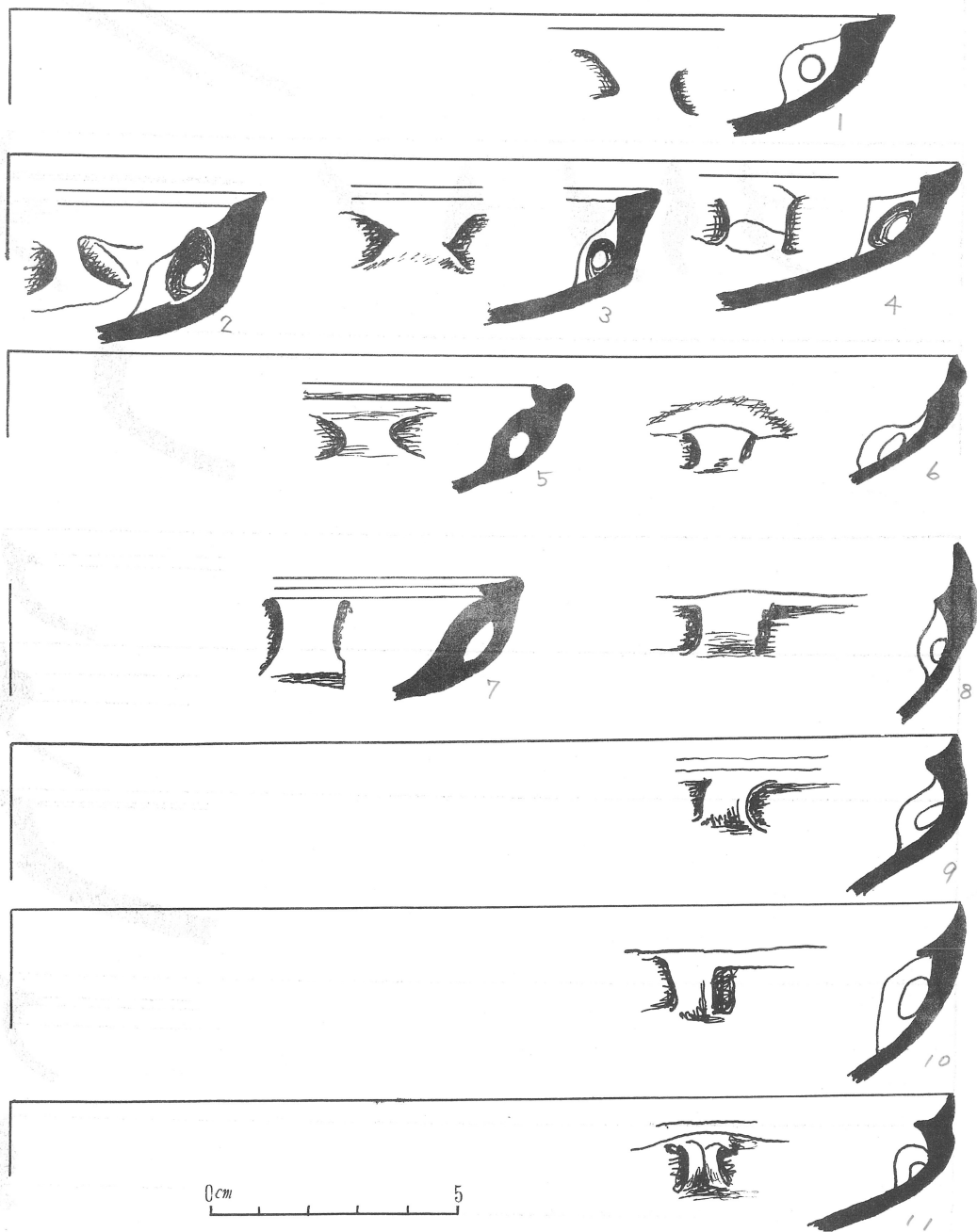




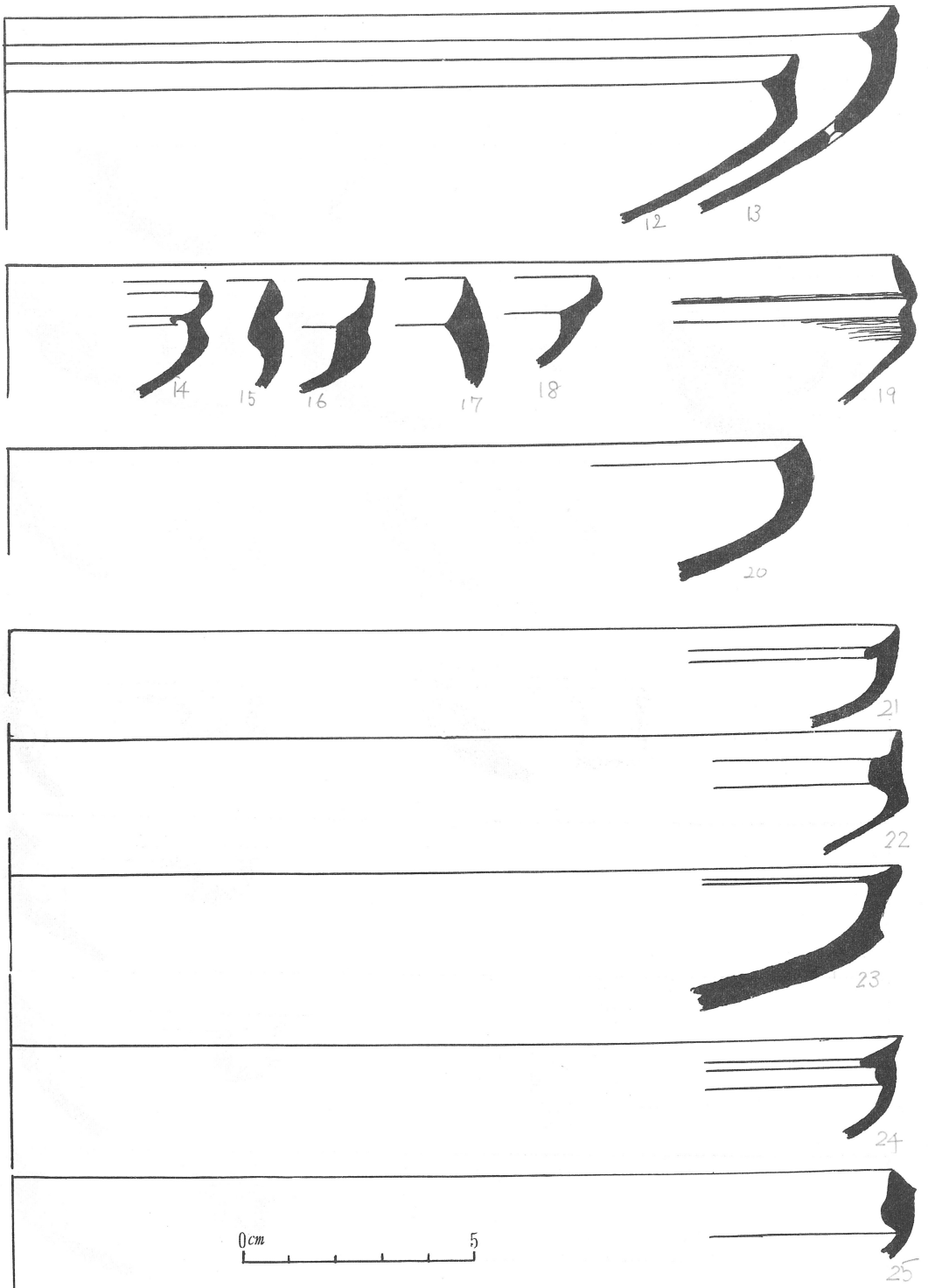
第11図 無釉・灰釉陶器（猿投窯・常滑窯）破片

見られているものである。

③常滑窯無釉陶大甕（第11図下中央、図版第9下図下左）平底の一部分であるが、時代は鎌倉か室町か、明確には同定できない。



第12図 (1) 内耳鍋破片



第12图 (2) 内耳锅破片

### 3. 内耳鍋

(第12図(1)・(2)、図版第10) 内耳鍋の破片はわりに多く、30片以上を数えるが、器の構造上やはり口部の遺存が圧倒的であり、その中でもまた内耳を具えている部分が過半数を越える。

器の大きさがほぼ一定していることは、口縁直径の推定からできることで、推定直径はほぼ28cm(9寸3分)というのがほとんどであり、わずかに24cm(8寸)・26cm(8寸5分)というのものもあるようである。

作りに大凡2型式あり、口縁断面の形や内耳の作りと取り付け方、および鍋の深さに、相違が見られると考えたい。

①第1型式(第12図上三段)は、口縁端を内に傾けてはいるが、大体一直線に切り、直ちに内傾して底に至る。従って底を含む全高は低いものと推定され、おそらく図上で推定して、せいぜい5cmくらいと考えられる。

内耳の形や取り付け方は、著しく不整で巾広く、いわば平たい粘土塊を貼りつけて、これに篋か串の類で両側より穿孔したもののようで、ひどいのは裂けかかっているのさえ見られる(第12図(1)第2段中、図版第10下図右上・中)。

②第2型式(同図第4段以下、図版第10下図下右・中・左上中)は、口縁端が第1型式より薄く立ち、蓋受け状の広い溝を具えるので、断面新月状を成し、そのまま内傾して底に移行するものもあるが、多くは内耳部で最も膨隆し、最大径はこの位置にある。これはあながち内耳を取り付けたがために生じた部分的な膨隆とも考えられないのは、内耳部でない同じ高さの他の部分の破片でも、そうした特徴は共通するからである。

そのように器壁のカーブは45°を越えるので、底における全高は、より大きいものと見られ、図上で推定7~8cmに達すると考えられる。

また内耳の形と取り付け方も全く異り、細い粘土の平たい帯の上下を押えて付けている。ときとして穴を大きくするために、器壁の方を抉っていることもあるが、それは飽くまでも補助的手段に過ぎない。

なお第12図(2)に図示した通り、口縁端の形態にはいろいろのものがあ、それがどちらの型式に属するか明確でない場合もあるが、多くはやはり第2型式に属

することと思う。

ただ1例、器壁に穿孔したもの（同図上、図版第10下図下左）があり、火にかけるものであるから、縄文土器等におけるように、結び合わせるためとも考えにくい。後考を待つより仕方あるまい。

第1型式は、すべての点において、より原始的であり、第2型式は、またその逆に、完成された形である。層位的所見を欠くので、どちらが先行した型式かを、ここで決定するわけには行かないのを惜しむものである。

## 第12章 江戸時代および以降の遺物

### 1. 陶磁器等

①染付 染付に2種類あり、陶質に近い全く不透明なものと、純磁質で光を透すものである。前者は古く江戸中・後期にも遡る磁器以前のものであり、後者はいわゆる銅版焼をも含む江戸末期ないし明治の製品と言ってよかるうが、ともに瀬戸地方の産であることは明白である。

a 陶胎 大小の湯呑茶碗（第13図右上2個、図版第11上図上中・左）・皿（第13図右第3段、図版第11上図下左より2）・おみき徳利（第13図左上、図版第11上図下右より2）などはそのわずかな例にすぎないが、通例の捩れ文・菊花文・唐草状花枝文・松竹梅文などをそれぞれ飾っており、茶碗・皿の類は、見込み中央に五弁の梅花または多弁の菊花文をもっているのが普通である。これは古伊万里における矢車文にならう意味のものであろう。

第13図左第2段、図版第11下図下右より2は、小さな仏餉器であるが、杯部に型押し5個分で構成される重ね菱文を飾っており、脚部は折れたのを更に使うためらしく、擦って平らにしている。

b 磁胎 磁胎のものは圧倒的に飯茶碗が多く、手描きの松竹梅文（第13図右下、図版上図下右）・山水文（第13図右下）のほか、銅版画による雷文地花散らし文（第13図右下、図版第11上図下左）のようなものまで見られる。図版第11上図上右の破片は上手（じょうて）で、神社関係のものかもしれない。

②黒褐釉陶器 ここでは第13図左下、図版第11下図中右より2に挙げた蓋を示すにとどめるが、ほかにも壺・碗らしいものの破片などが若干ある。

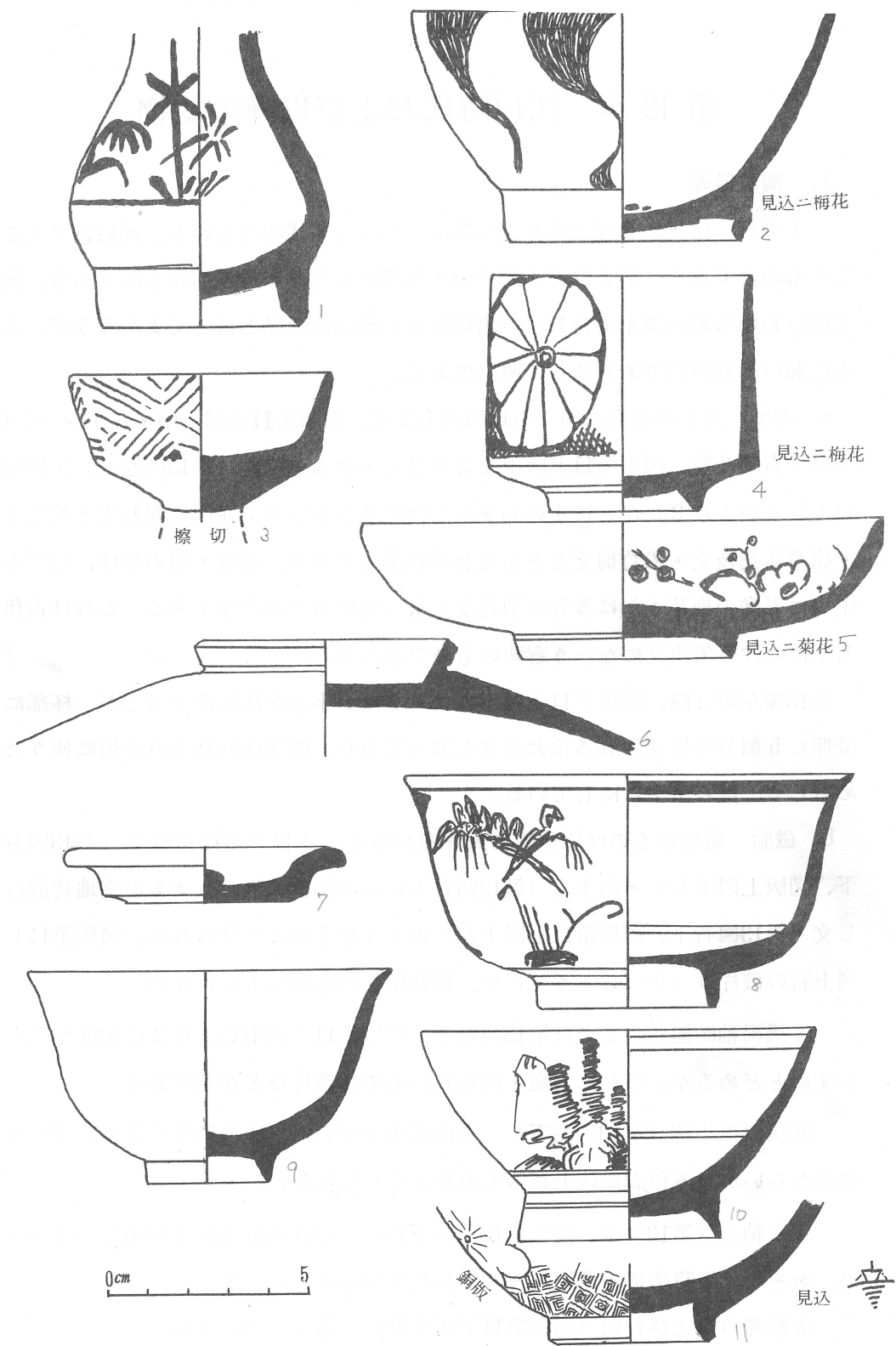
③灰白色小碗（第13図左下） 全面がカセていて、灰白色多孔質で、完全な焼成ならいかなる色調に焼上がるものかよくわからない。

④水釉蓋（第13図中、図版第12上図下右） 帯青淡黄色の透明釉をかけた蓋で、おそらく当時味噌・煮物などを入れた蓋物の蓋であろう。

⑤絵瀬戸および石皿（図版第11下図上段） 馬の目皿を含む。

⑥織部（図版第11下図中右）





第13図 陶磁器（染付その他）破片

⑦大甕 緑の厚い赤い素焼の大甕だが、この名和では、船津神社の禁忌により、不浄のことに使わないという伝承があるので、おそらく水甕に使われたのであろう。

⑧蚊燻し 赤い素焼で、低い台がつき、胴部球形に近く、上半に煙出しの穴をいくつか穿ち、2箇所に半環状の把手を具え、同じような把手をもつ蓋を伴なう。内面は全く煤けて、その用途を如実に示している。

⑨黒色素焼吊手鍋 黒い素地が特徴的であり、凸字状で一孔を穿つ吊手を持つ。これには鉄の弦が付けられるのであろう。

⑩播鉢（図版第12上図上右）線の疎密・施文具櫛歯の数に多少の相違があるが、江戸～明治のものであろう。図示したのには㊦の刻印が見える。

⑪渋紙手灯明皿 普通の小皿形のもの（第14図下）と、灯心を通す切欠きのある立上がり内側にもつもの（第14図下、図版第11下図下左より2）とがある。

⑫渋紙手卸皿（第14図下、図版第11下図下左）器胎の厚いわりに、緑の極端に薄い作りで、内面には口縁を除き全面に格子状の鋭い刻目をつけ、胎土は篋当たりに従い強く盛上がって、充分用途に役立つと見られる。

⑬土鍾 常滑焼であろうか、薄く釉のかかった、現在も見られるような、短かいのに少し胴の膨らみの強い種類である。

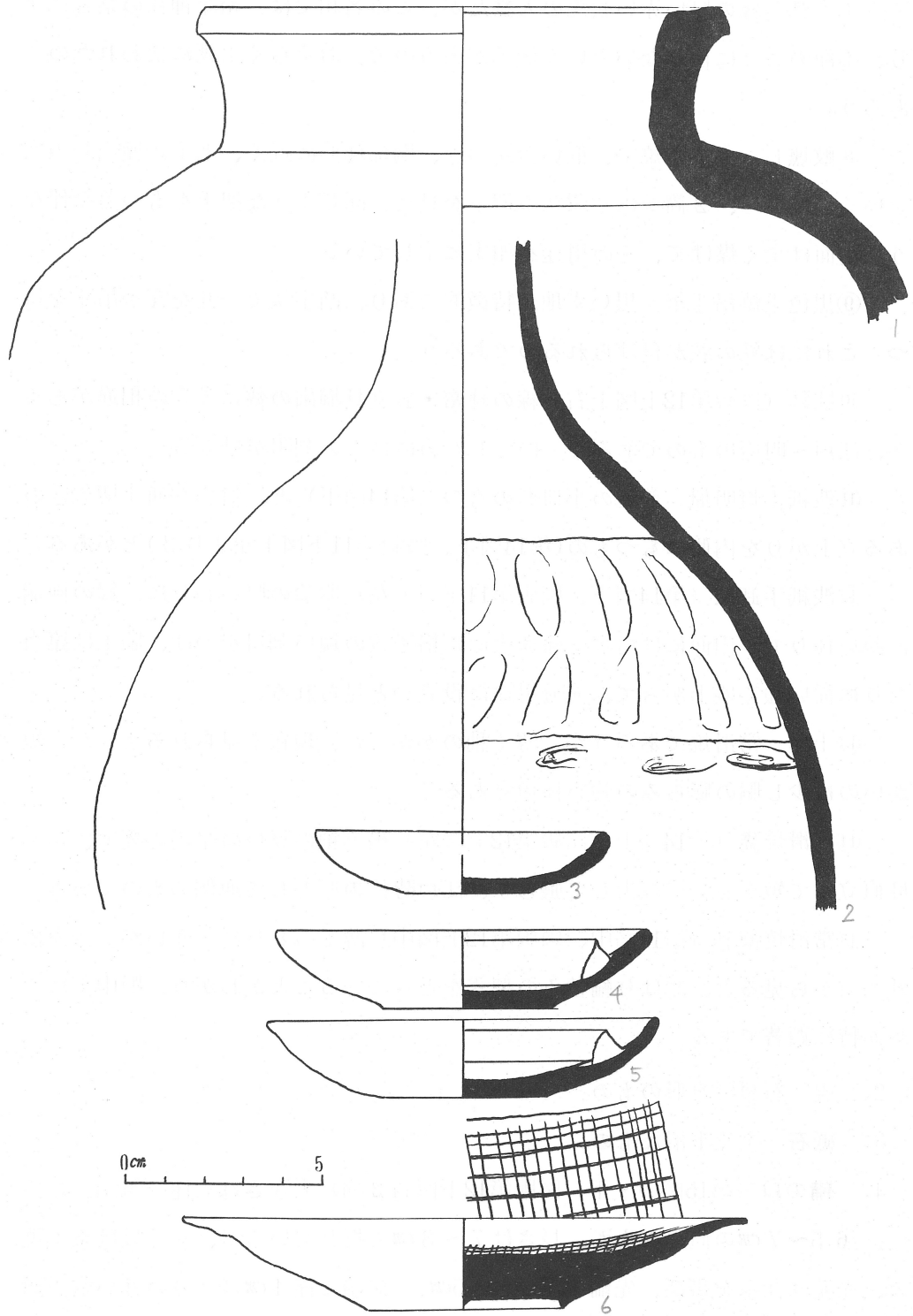
⑭常滑焼甕（第14図上、図版第12上図左）褐色釉の縦長の厚手の甕で、頸部は直立して短かく、口縁大して張らず、江戸時代の形として通例のものである。

⑮常滑焼徳利（第14図中、図版第12上図中）薄手のわりに大きいのが、内面に残る痕から見ると、やはり輪積みの型式をとっていることがわかり、胴中部にそれが特に顕著である。

2. 硯 石製長方形のもの。

3. 砥石 全く平滑なもの。

4. 鞆の口（第15図中・下、図版第12下図右2列）大きさは大体一定していて、6.5～7cmの直径をもち、長さは7～8cmで折れているが、赤く焼けた素焼で、先端は丸みを帯び、先端で径2～2.5cm、他端で径4cmばかりの丸い穴を通して、穴の径が先端の方を細くするのに2種類あり、順次狭まるものと、先



第14図 常滑焼・波紙手破片

端から5~6cmのところ急に狭まるものがある。両者の間に時間的差違などがあるかどうかは、わからないが、いずれにしても、先端を細くするには、おそらく吹込まれる空気を圧縮して、その力と速度とを増させる効果をねらったものと見られるのである。

先端3.5~5cmばかりの間は、外面に厚さ数mmから1.5cmくらいの、多孔性でしばしばガラス状を呈する鉄鏝が付着する。

5. 鉄器・鉄鏝 鉄器としては大小の折釘（第15図上段、図版第12下図中）で大きいのは長さ15cm巾1.5cm厚さ5mmから、小さいのは長さ4.5cm以上、巾5mm厚さ4mmのものまであり、小形のもの普通は建築用と考えられるにしても、大形のもののはたして建築用なのか、あるいは船舶用なのか、後考を待つことにしたい（図版第12下図左列）。

鉄鏝は、大小不定の塊状で、その一部を試料として、新日本製鐵KK名古屋製鐵所に提供して、分析を依頼した。その結果は次の通りである。

	T.Fe	SiO <sub>2</sub>	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	CaO	MgO	Mn
フィゴ先のノロ	3.57	62.46	14.03	6.57	1.23	—
鉄塊	1	45.02	24.39	3.57	1.68	0.40
	2	49.47	19.57	2.73	1.82	0.05
	3	57.02	10.43	1.59	0.77	0.03

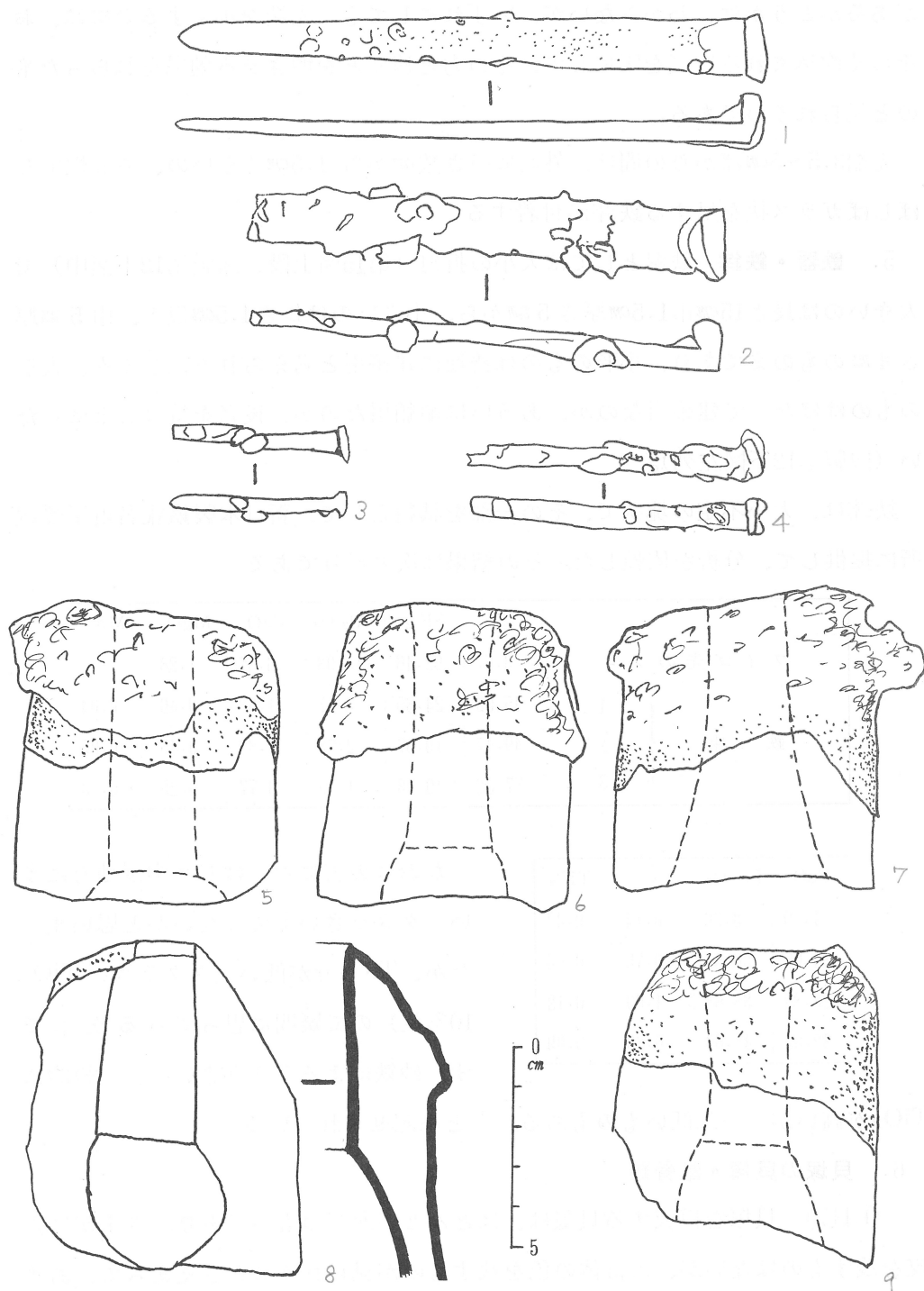
FeO	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	C	TiO <sub>2</sub>
1.29	3.68	0.14	0.43
34.05	26.54	0.75	0.03
28.88	38.64	1.09	0.12
32.33	45.60	0.80	0.09

なおこの表には『はじめ中国地方に多い「タタラさい」ではないかと思いましたが、TiO<sub>2</sub>分が低い（タタラさいTiO<sub>2</sub>10%位）ので疑問に思っている次第です。砂鉄によるタタラさいは、一般的に

TiO<sub>2</sub>が高いが、一部低いものもある。』と添記せられている。

## 6. 貝塚の貝類・獣骨類

①貝類 貝塚を構成する貝殻は、ほとんどが海産のものであり、さすがに表皮を残すものはないが、殻自体の色を残すものが見られることさえあって、あまり古いものではないことが推定されるばかりでなく、アカニシも、原始古代のも



第15図 鉄釘・輔の口破片

のならば、肉を取り出すために、必らず殻背を割っているが、そういうものはなかった点からも、それ以後のものであることが考えられる。二枚貝で合わさったまま出土した数も多かったが、それは貝層に攪乱がなかったことを意味するとすると、貝層の底に至るまで、江戸時代遺物を含んでいた点で、貝塚自体の形成も江戸時代と考えるのが自然であろう。

さて発見量の多い順に列記すると、

ハイガイ サルボウ カキ シオフキ アカニシ オオノガイ オキシジミ  
ハマグリ アサリ サザエ アワビ ウミニナ オオタニシ (図版第13上図)  
で、名和八幡社貝塚(註)の状態によく似てはいるけれど、いくらか種類が多いばかりでなく、サザエ、アワビのように、より離れた岩礁性のものを少数含むのは、当然これらが交易の結果もたらされたもので、地元産のものばかりでないことを示している。

② 獣骨類 ウマの臼歯のほか、未詳の四肢骨片があるが、華奢な点からシカではないかと思う(図版第13上図下中)。

## 第 13 章 考 察

今も述べた通り、本貝塚は、江戸時代に構成されたものと考えられる。しかしそれだけでは、一体縄文晩期以来の発見遺物はどういうことになるかという疑問が直ちに起こるが、江戸時代の遺物より数がわりに少なく、破片としての形状もまた零細なものばかりである。江戸時代の陶器類が比較的頑丈なせいもあろうが、大形の破片が目立つことときわめて対照的である。

この場合考えられることは、付近の畠地および低地に縄文以来の遺跡があり、そこからの出土品が耕作の邪魔になるということで、このごみ捨て場へ投げ入れられていたのではなかろうかということである。

縄文晩期の遺跡は、まだよく性質はわからないながら、北方の名古屋市緑区大高町斎山貝塚など小さな遺跡が点在するようであり、そうした一連の小集落が名和町内の谷谷に分布していても、むしろ自然であろう。

弥生後期から古墳時代にかけては、特に記すほどのこともないが、奈良時代ごろの瓦や甕が出たことは、注目に価する。すぐ東に鎮座する船津神社は、社伝には、応神朝に社殿を建て、天慶2年(939)勅によって社殿を造営したとあるが、そのころに神宮寺も併設されていたのではなかっただろうか。

船津神社には、後の古井戸のあたりから出土したという斜格子唐花文の軒平瓦(図版第13図下図)がある。あまり見ない種類の文様だが、おそらく平安末か鎌倉初期のものであろう。今、凹面に「佚井」の釘彫の二字があるが、これは後刻ではあるまいか。

ご祭神の一柱に塩土老翁大神があるが、製塩具と言われる角形土器の出土にふさわしいことである。

角形土器が、はたして製塩具だとすると、その衰亡したあとはどうなったのだろうか。ここで内耳鍋の盛行が、それを受継ぐものとして考えられるのではなかろうか。それでなければ内耳鍋ばかりわりに、多量を出す理由が見出されないように思われるが、いかがであらうか。内耳鍋に発展の2段階が見出されたことは注目されてよからう。



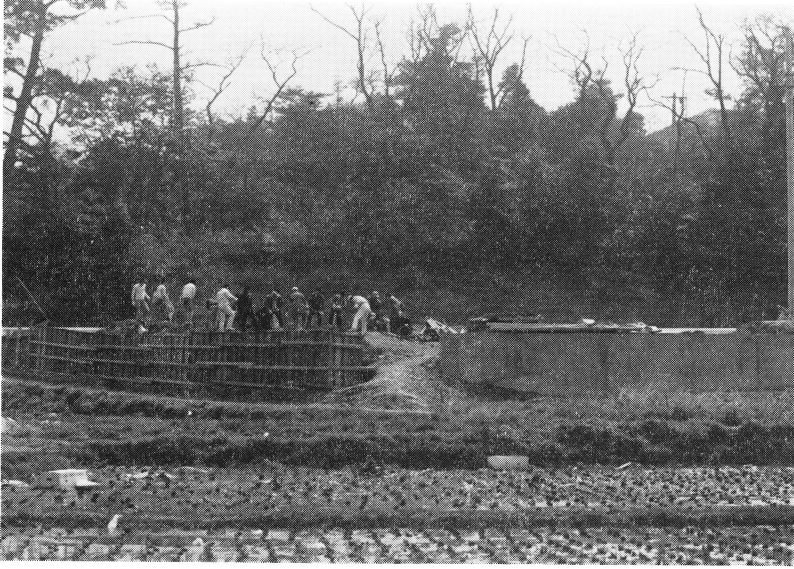
鎌倉時代に常滑窯のものがわりに少なく、古瀬戸窯のものがわずか1点ながら見られるのが、何か交易ルートおよびその圏域を示唆しているように思われる。やはり「あゆち瀉」ないしは「鳴海瀉」的なにおいが濃いようである。そのころまでこのあたり、海上を含めて制覇していた荒尾氏の主流が、室町幕府に仕えて、京都に移ったらしい。その隙間をねらって、三河の一色氏が進出すると見られ、そのせいか、その後ここの集落自体衰亡したのか、遺物がきわめて少なくなる。そして江戸の泰平の時代になって、再び集落が栄え、鍛冶屋も住みついて、俗称「元鍛冶屋」の地名を残したのであろう。

下の低地は当時まだ入海で、三本松を目当てに船が出入りしたと言伝えるから、農・漁両業をあわせ営んでいたものだろうか。

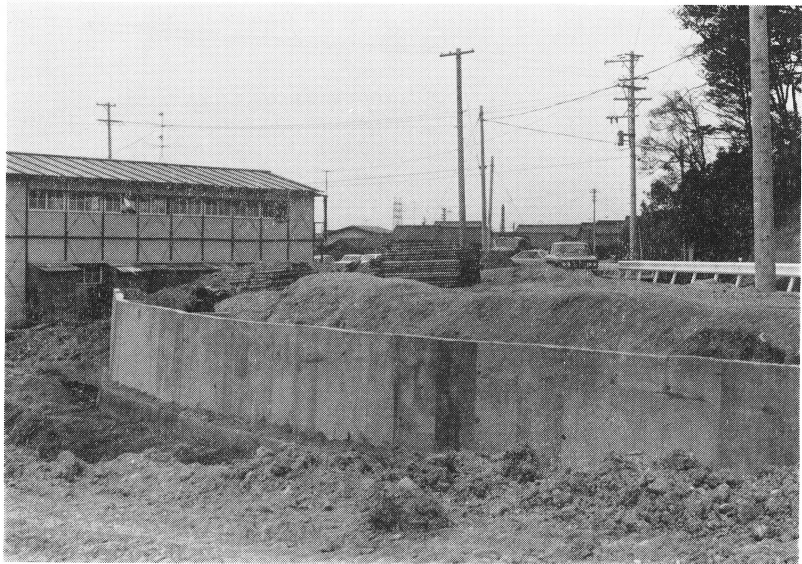
話は繰返されるが、この土地の正式の名を「堂ノ前」と呼ぶのは、「緒言」にも述べた通り低地を隔てた西方に阿弥陀堂があったからだという。その阿弥陀如来坐像は、今長光寺に祀られているが、全高60cm膝張50cmで、鎌倉様式と見ていいと思われる。これが直ちに船津神社にも神宮寺があり、その関係と結びつけていいということかどうかは、今にわかには何とも言われないが、とにかく、いつのころまでか、古くはそうした堂があったというわけである。このことは、遺物の点でも、鎌倉までがわりに栄えていたと言えることと一致していて、室町時代にはこのあたりの生活に、ひとつの大きなギャップが考えられるということなのであろう。

堂ノ前貝塚が語りかけるこの土地の歴史とは、以上のように受取られるのである。

図版第1



堂ノ前貝塚全景（背後は船津神社境内）



同 （側面より見る）

図版第2

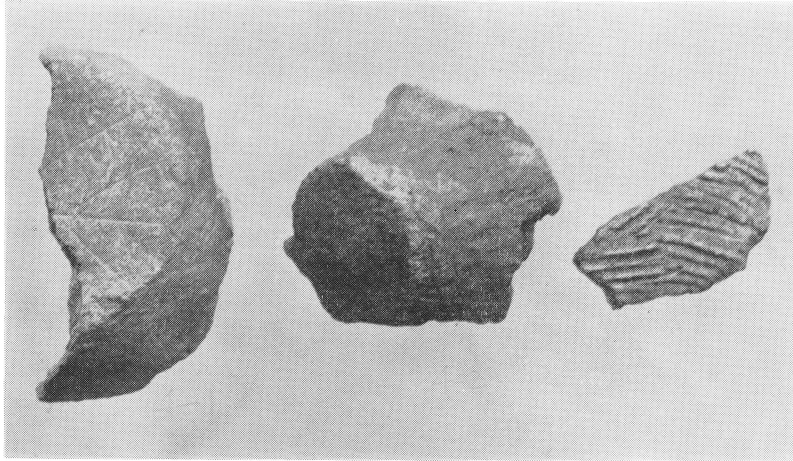


北側の貝層断面全景

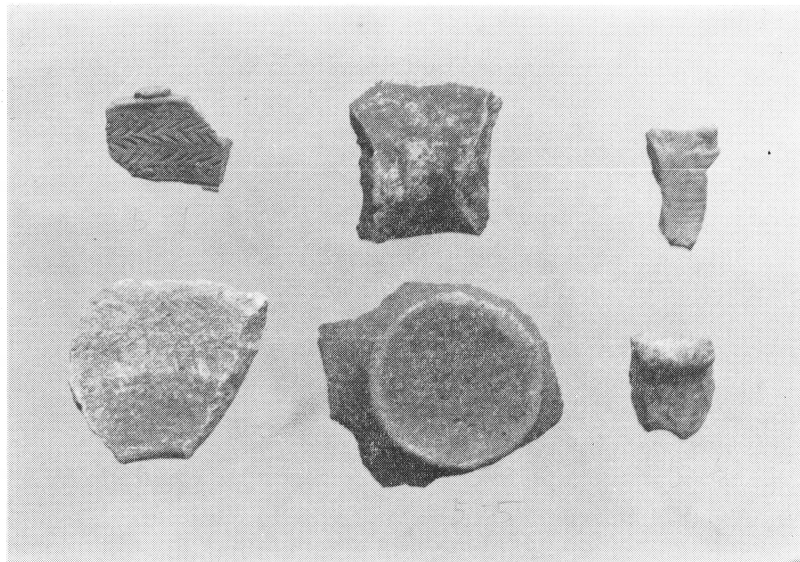


上野中学校職員・生徒らによる第1トレンチ発掘

图版第3

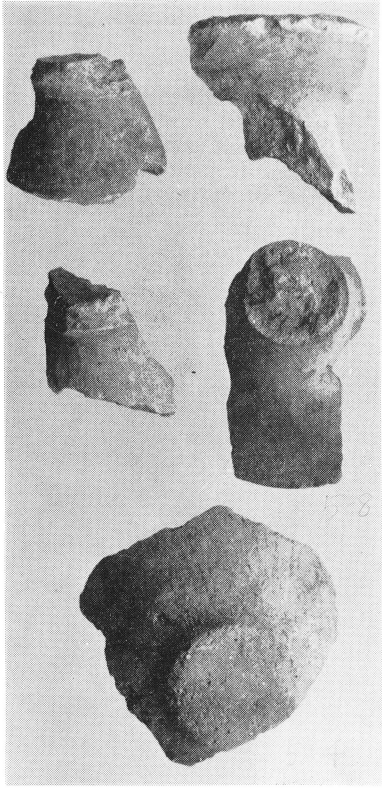


縄文晩期土器破片

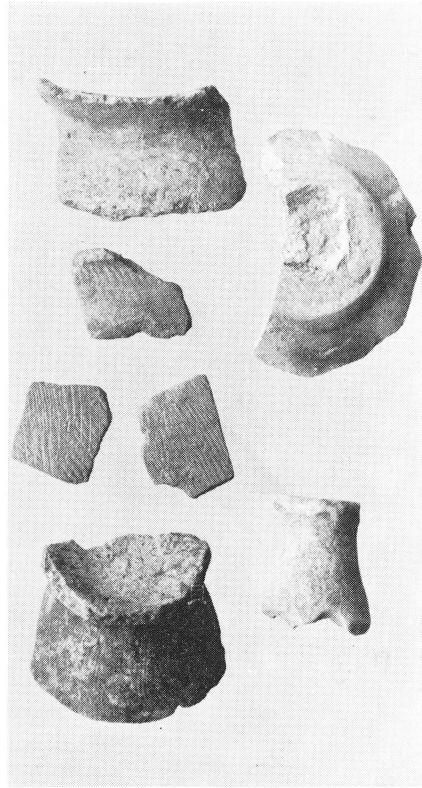


弥生後期土器破片

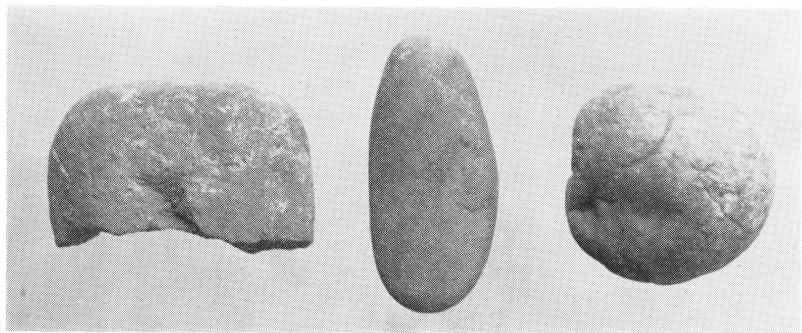
図版第4



弥生後期土器破片



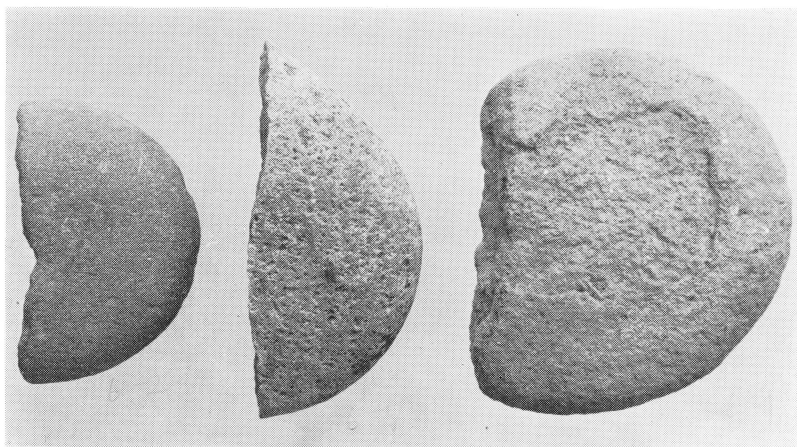
土師器破片



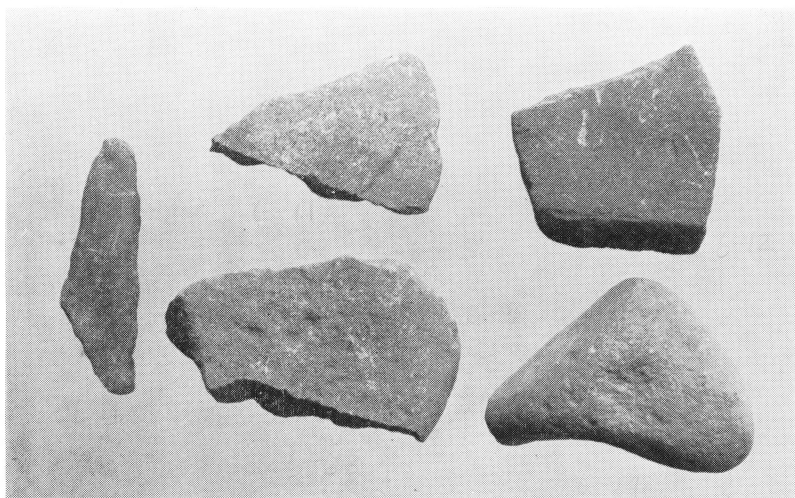
叩石



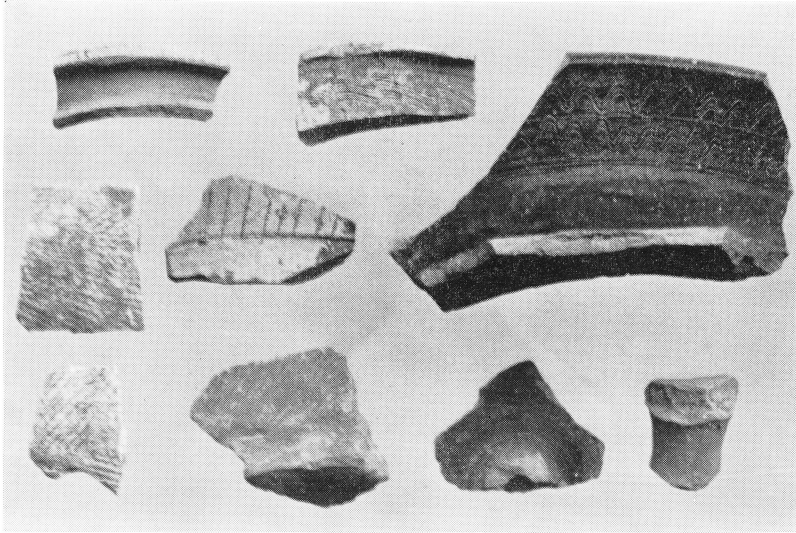
图版第5



磨石



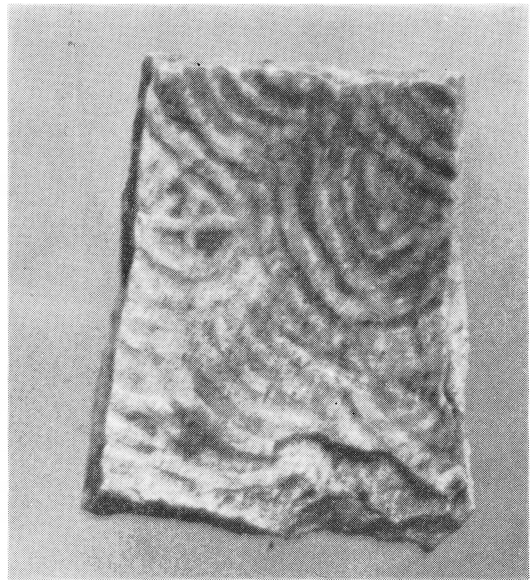
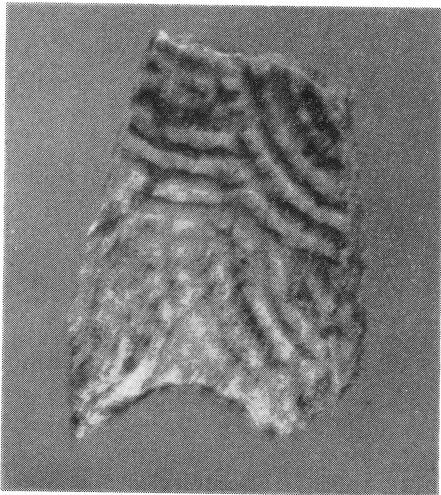
砥石



須恵器破片

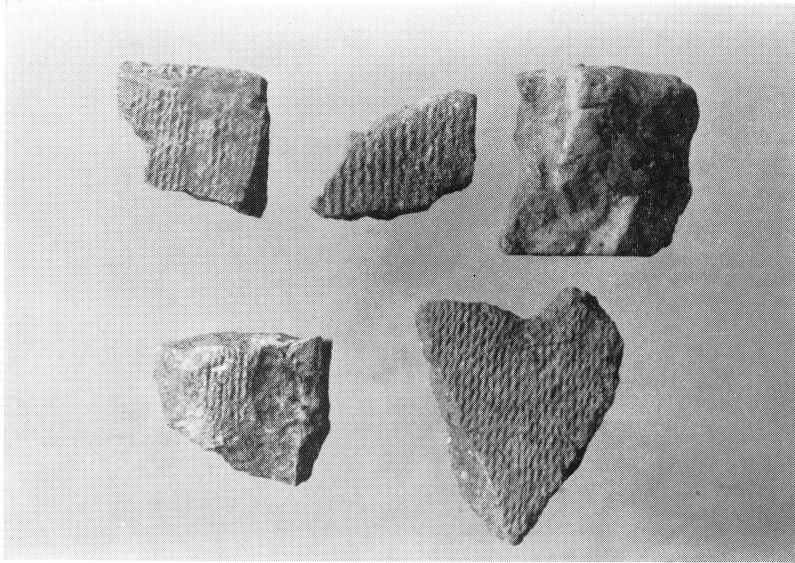
原 寸

原 寸

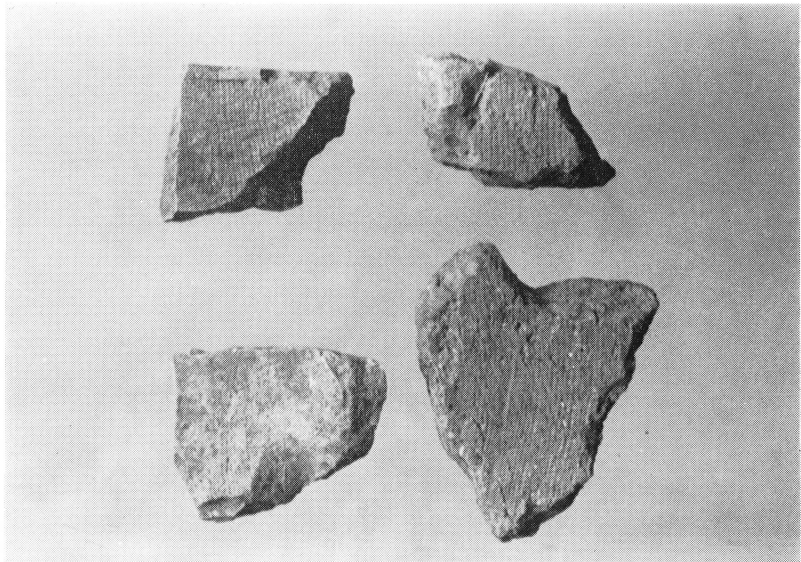


同上左端破片、内面の同心円叩文

图版第7



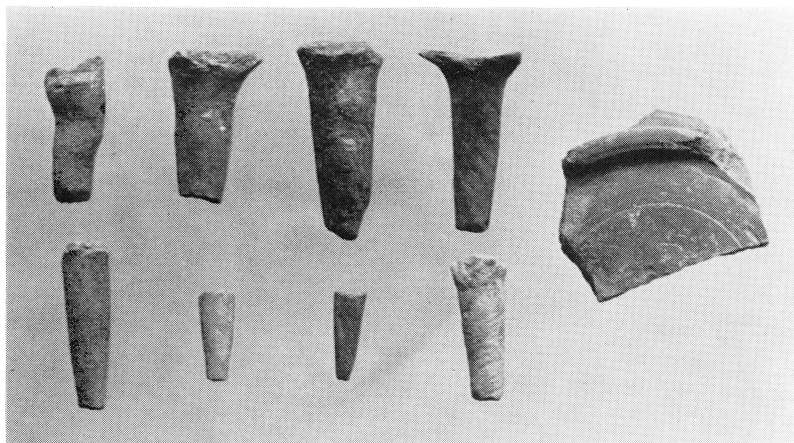
平瓦（凸面）・甗（右上）破片



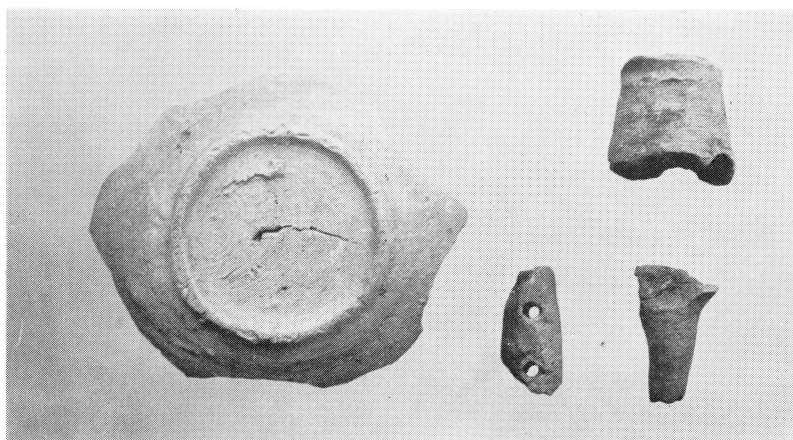
同上 平瓦凹面



图版第8

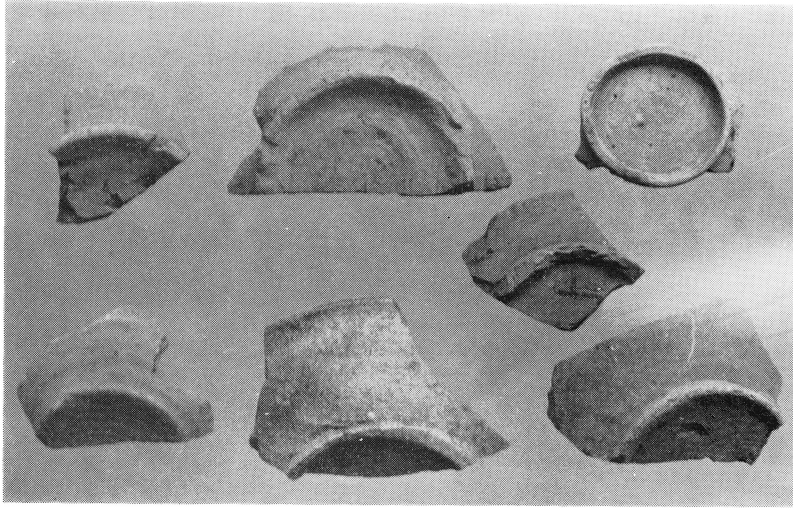


角形土器破片・須惠器杯破片（右端）

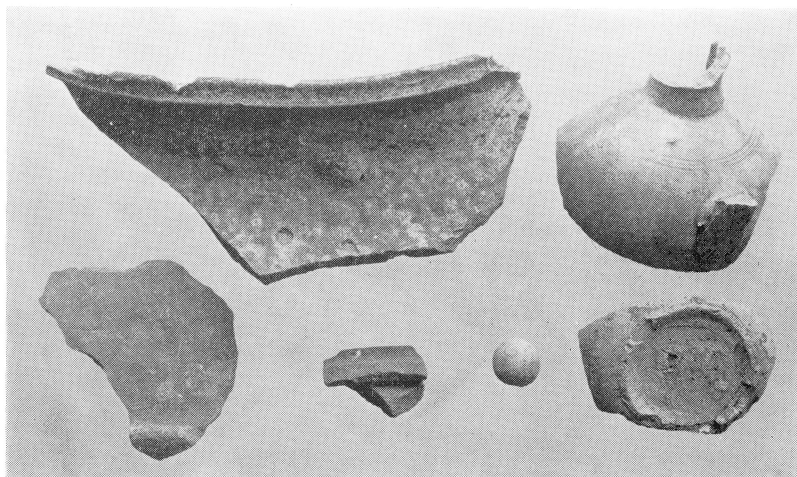


弥生後期土器破片（右上）・角形土器破片（右下）  
有孔土製品破片（中下）・無釉陶碗破片（左）

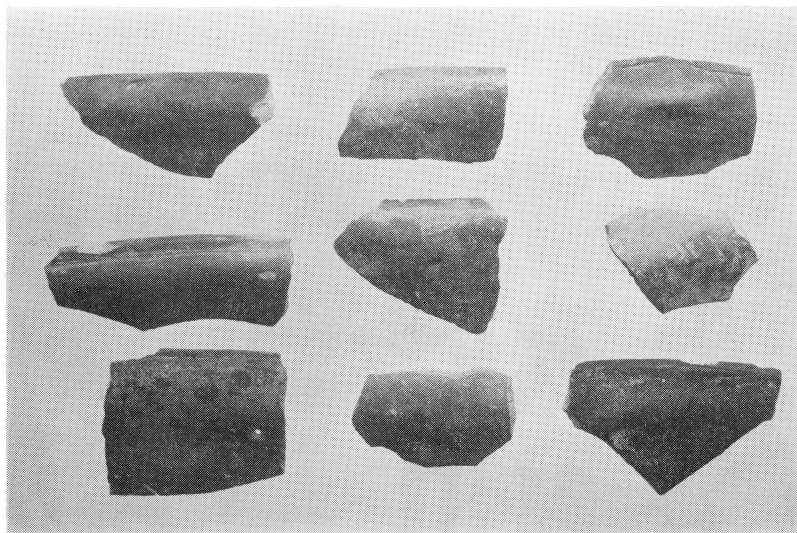
图版第9



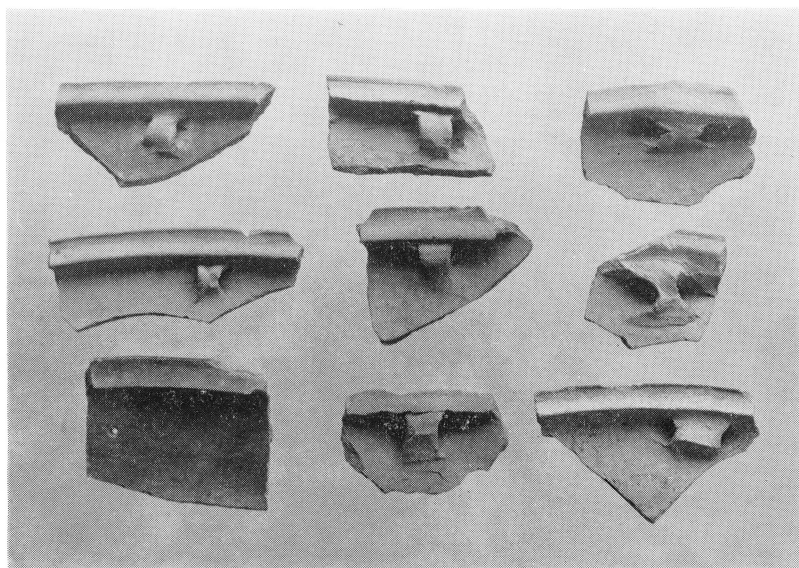
灰釉・無釉陶碗破片・素燒碗破片（左下）



綠色灰釉把手付水瓶破片（右上）・無釉陶碗破片（右下）・陶丸（中右下）  
常滑燒大甕破片（左上・下・左中下）

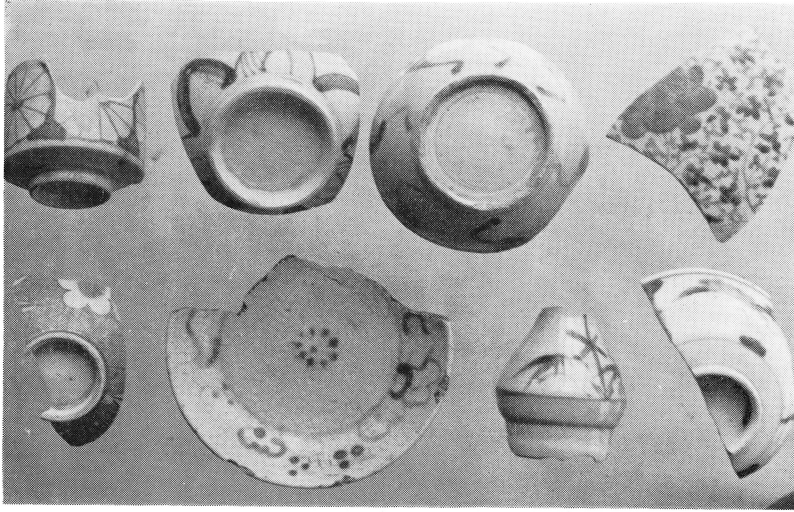


内耳鐃破片（外面）

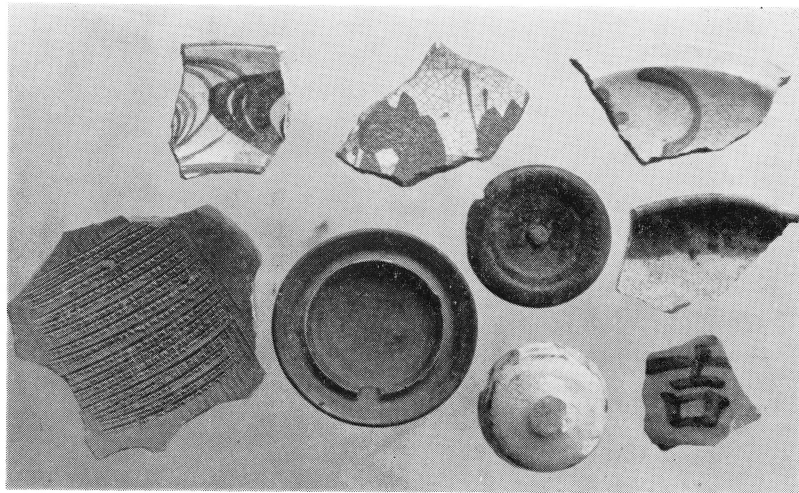


同（内面）

図版第11

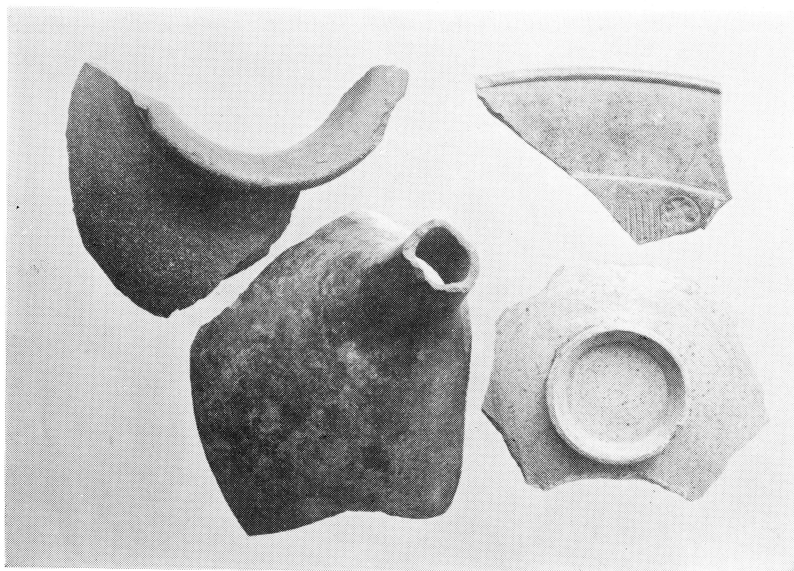


染付陶・磁器（右上下）破片

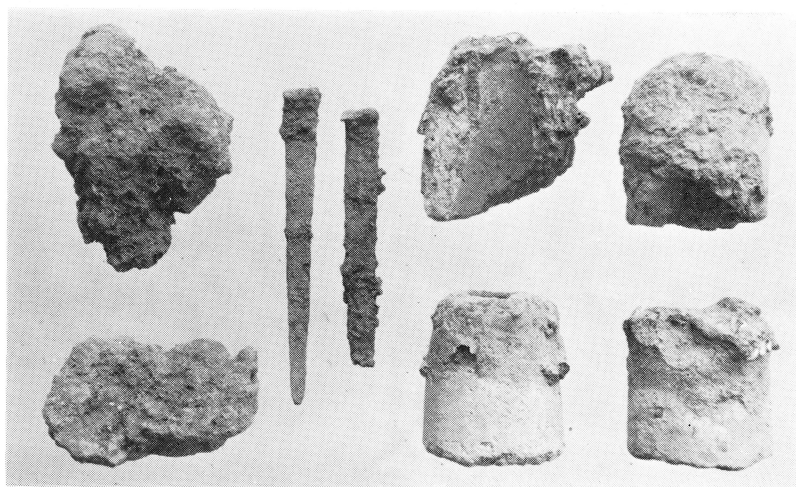


絵瀬戸破片（上段）・黒褐釉陶器（中左）・織部破片（中右）  
渋紙手（下左2箇）・染付破片（下中・右）

図版第12

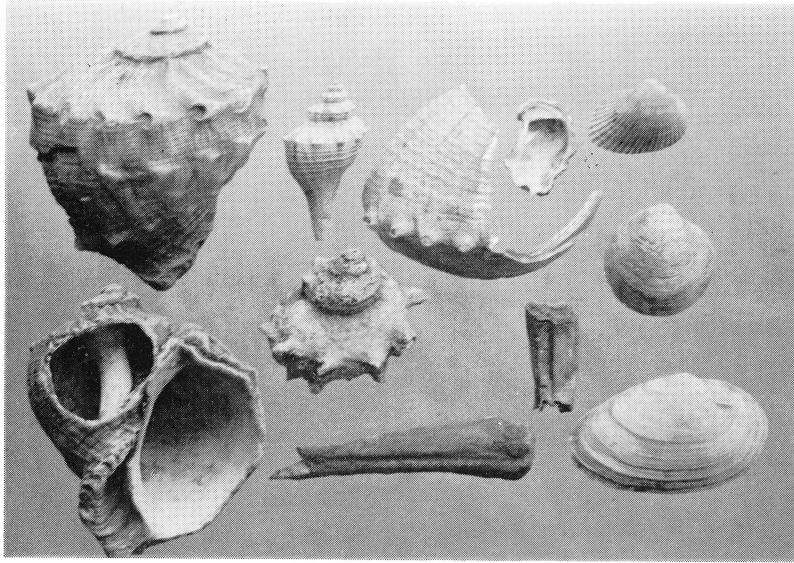


常滑焼破片（左2箇）・播鉢破片（上右） 水粘蓋破片（下右）



輔の口（右2列）・鉄釘（中2箇）・鉄鋸（左2箇）





貝殻・馬白歯（中右）・獣骨破片（中下）



船津神社境内出土軒平瓦破片（船津神社蔵）

#### 校正者からおわび

昨年夏、吉田先生から玉稿は届けられました。しかし、先生が11月21日急逝遊ばされたため、ご生前に一方ならぬご指導を賜っていました未熟の、石野武が校正の大役に当たりましたので、誠に不出来で申訳ありません。先生のご霊前に、かつまた大方諸賢に、おわ いたします。

付記（註2）（註）はいずれも先生が校正中に付記する心算だったと思われれます。

